

# 東方幻想無限連鎖

にけ・リユノ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

目が覚めると幻想の世界にいたクロノ。能力や武器、あるいは最悪の過去を使って不幸や呪いをぶち破す!!

## 目次

幻想の始まり	1
紅魔探索遍	4
二つの異変	8
月の宴	16
クロノ	20
お前絶対ぶち殺す	31
祝祭	34
鬼と破壊神	39
クロノという名前	43
白い世界	55
僕には分からない①	59
僕には分からない②	62
僕には分からない③	65
暴怨霊の異変	71
四落ちの積み	77
正しい道	81
これからの道	84
銀のオオカミ少女	88
情報違いのアホ戦記	93
ペンは剣よりも強し	97
違い	100
魔法だゝ吸血鬼だィオオカミだィ	103
ラスボス	109
分かりやすい絶望	112

化け物	117
幻想の終わり	123
桜の舞う空	126
設定、謝罪	129
花見①	132
花見②	136
喫茶店	139
洗脳	142
歪みの始まり	145
神と妖刀	148
狼日記	151
狂乱	153
狂乱②	156
狂乱③	158
高笑い	160
高笑い②	163
飛ばされた異常	166
終わらねーからな！	169
模擬戦	171
ギブミーチョコ！	174

## 幻想の始まり

(ここはどこだ?)

起きて一番に思ったことがそれだった

記憶はあるが今は言わない「いや言えよ」と聞こえたがネタが無くなるから黙っとく

そのうち過去遍造るからそれまで待つて

知らない場所に来たらまずは探索かな?

意外と魔力が濃い。木もあるし多分森だと思う

鎖の羽を開いて(てかなんで鎖型なんだ? 正直あの人のセンスを

疑う) 飛んで周りを見ると東に神社があった

また、大きな湖や竹林、高い山が見える

そしてもう一つわかったことがある

多分ここ結界に囲まれている

神社に行くか結界を壊すか

「神社に行くかな」

こうなった

間違えてはいない判断のはずだ

そっちの方が平和だし

何か人魂が飛んできた

邪魔だな

この時点で危険であることはわかった

無視して音速で飛ぶが普段の三割くらいしか出せない? 着いたし  
いいや

「あの、すみません」

巫女さんと霊? 半霊? がいつしよに何をやっているんだろう?

話を聴くと冥界から霊が逃げたらしい

たぶんさっきの奴だろう

「三秒ぐらい待つてください」

鎖を出して再び音速で飛ぶ

三秒後鎖に捕まった人魂が帰ってきた

とりあえず自己紹介することになった巫女さん↓半霊↓僕という  
順番だ

まずは巫女さんからだ

「私は博麗霊夢、幻想郷の『博麗の巫女』よ」「私は魂魄妖夢」「僕はク  
ロノです」

「ちよつと聞きたいけど、じゃあその鎖は？」

「肉体に生やす型の武器ですね、知り合いに作ってもらいました」

「私の剣とは違いますね。それと、ご協力ありがとうございます。  
霊を送って来ます」

魂魄さんが霊を連れ、飛んでいった

「それと僕も聞きたいことがあります。まず、ここはどこですか？十  
分くらい前に気が付いたらここにきていました」

「ここは幻想郷の博麗神社で、博麗の大結界によって外界と隔離され  
た世界。誰でも歓迎する理想郷よ」

「じゃあ僕は？」

「もちろん歓迎するわよ」

「ありがとうございます」

嬉しい答えだった

生活できなかつたらどうしようとは思っていたから……

「それとしばらくここに泊まって」

「えっ、あ、ありがとうございます」

正直すごく驚いた

初対面の他人を助ける勇気って凄い

「それと博麗さん、後で模擬戦いいですか？」

「霊夢でいいよそれと後でやろう」

「ありがとうございます」

『相手を知るの闘いから』と、記憶のどこかにあるようないなような  
……

「ただいま戻りました」

魂魄さんが帰ってくる

「お帰りです魂魄さん」「妖夢でいいですよ」

「分かりました」

そして数分後、模擬戦が始まった

「お願いします」

開始直後、僕は3対6本の鎖を生やし、攻撃を開始する。霊夢はお払い棒らしき物と符を出して迎撃する。

「霊符 夢想封印」

七色の弾幕が鎖を全て破壊し、僕に飛んでくる、鎖の再生まで残り三秒。

夢想封印を無効化した時には霊夢はいなかった

周りから大量の符が飛んでくる

ルールは弾幕ゲーム回避できない攻撃は禁止で先に倒れた方の負け、回避や鎖、無効化で魔力が枯渇した僕の負けだ

模擬戦の後で、消えた理由を聴くと、切り札だから内緒と言われたその後、神社の一室を借りて、この世界での一日目が終わった

## 紅魔探索遍

二日目が始まった

昨日霊夢が

『泊める替わりに家事よろしく』と言っていた為、慣れきった家事をしている所だ

「TYPEアームズ」

その言葉の直後、クナイ型の鎖がマジックハンドのような型に換わる

とりあえず無限に入るちよー便利な箱から出したパンとワインナーでホットドッグを造る

霊夢は美味しいと言っていたため、少し安心した

霊夢が里の方に向かう

水洗いだが、洗濯を済ませて掃除をする

妖夢さんと金髪の魔女さんがきた

誰だろうか？

「おはようございますクロノさん」「おはよう妖夢さん、隣の人は？」

「魔理沙だ、お前がクロノか？」「はい？」

「勝負しようぜ」「は？」

会って二日目それがそれはおかしい。さてはコイツ脳筋だな

いやでもこれは挨拶の一種か……

「掃除をしているのでいまは断ります」「じゃあ後で」「はい」

観た感じ常識はあるようだ

初対面の人への批評が『常識があるかないか』は、少しおかしいが

「霊夢さんは？」

「里に行きました」

◇ ◇ ◇

その後何とか勝つ事が出来た

怖かったなー

始まった直後に『恋符 マスターズパーク』と言ってレーザーが飛んできたから



霊夢が帰ってきて、四人でご飯を食べた

「そろそろ幻想郷を案内した方がいいのではないのでしょうか?」「確かにそうね」「だなー」

まだ二日目であるが、勝手に話が進んでいる

「紅魔館からはどうだ?」「いいですね」「紅魔館?」

固有名詞だろうが、一応聞いておく

「吸血鬼の家で、意外と話を通じる場所よ」「私も行くから大丈夫だぜ」  
不安でしかない、脳筋だし

「ありがとうございます」

一応そう言った

準備(したく?)が終わってさっさと出発した

◇ ◇ ◇

「邪魔するぜ」

まるで実家のようにノックもなく不法侵入する魔理沙

その瞬間、ナイフが四方八方から飛んできた

階段の上にメイドのような人がいた

吸血鬼ではなさそうだが、どうだろうか

僕は鎖で易々とナイフを弾く

観た感じ時止めかワープ、生成のどれかだろう

「咲夜何をしているの?」

「すみませんお嬢様」

お嬢様?

この水色の髪の毛の吸血鬼?

「この主ですか?」

「ええそうよ私はレミリア スカーレット 紅魔館の主よ」

「クロノです」

何故だろう

この人からは危険な感覚がする

黙っとくか

「こいつは最近ここにきた奴で、案内しているんだ」

「へえ、魔理沙、パチエが本を返してって言っていたよ」



「どうだった?」

「戦闘郷と脳筋がいつぱいでした」

「質問したいことがあります」

「そんな顔してどうしたの?」

言うことはさっきの手紙だ

「異変って何ですか?」

「妖怪などがおこす事件のことよ」

「じゃあ...」

「じゃあ明日、まずいことになります」

「何で?」

「多分レミアさんがフランへ書いた手紙です」

「内容は?」

「フランへ 明日、永遠亭を利用して異変を起こします」

「...」

「今日はもう寝なさい、明日魔理沙... と華仙と一緒に何とかするか  
ら」

「分かりました...」

「おやすみ」

一日目が終わった

## 二つの異変

三日目が始まった

「暗いな、時間は何分だろう」

そういつて箱から出した時計を見る

6:47

おかしい

今は3月。にもかかわらず辺りは真つ暗

外を見る。月の色が緑っぽい

「霊夢ー」

急いで霊夢の部屋へ行く

いなかった

昨日言っていた永遠亭とやらに言ったのだろうか

昨日の話的に魔理沙と華仙？もだろう

僕は永遠亭つてところの場所は知らない

だから今から調べる

「生命探知 人物指定 『博麗霊夢』」

索敵に便利な魔法を使い、方角が分かった

今からそこ行く

例のごとく鎖の羽を生やし、音速で飛ぶ

暗い、大きな竹林が見えた

「……はあ」

僕は今すぐく疲れています

変なやつがけんかを売って来ます

どうすればいいですか？

「私は早苗、二人の神々の力であなただを止め——」

コイツ敵だな

手に鎖をさしてぶんまわす

気絶で済ましておこう

というか神？怪しい宗教でも入っているのかな？

宗教勧誘ならお断りします

あつ 霊夢いた

「霊夢ー」

霊夢がきずく

「何でクロノがここにいるの」

何故か少し怒っていた

「まあまあ、細かいことは気にするなよ」

魔理沙、ナイス

「そちらは？」

「私は茨木華仙、初めまして、クロノ…でいいよね」「初めまして茨木さん」「華仙でいいよ」「分かりました」

「おはようクロノ」「夜だよ魔理沙」

しつかり挨拶？する

「クロノも来たなら永琳も大丈夫そうだな」

「永琳？」

「結界がヤバいやつだ」

「それは有利だね」「少し待ってください」

右手を上げと天から空色の大剣が落ちてくる

太陽剣ソルス。これが名前だ

「じゃあ始めます」

「二「何を？」」「それと危険な予感がするんだが」

「雑魚処理です」

「紅魔館や宗教の人のように、協力をしている人がいるようなので」

「確かにそうね古明地姉妹もいたし」

誰？

「気絶で済ましておくので大丈夫です」

「じゃあ始めます」

『火力『零』閃光『最大』範囲『竹林全体』除外範囲『半径10メートル』』

設定が完了した。簡単な設定だからすぐ終わる

「それじゃあ、『天翔閃』」

自分から10メートル以内を除いて光の柱が竹林全体をおおう

「三割ぐらい使ったかな」

僕のソルスは太陽光をエネルギー源にしているため、夜では弱い  
暗いとエネルギーの消費が激しい

「「うわぁ……」」

そりゃ引かれるか

「この人のことについて教えて下さい。僕一人でやりますから」

「幻覚を見せてくる兎と結界と弓を使う赤十字の月の住民、弾幕馬鹿  
のかぐや姫よ。本当に一人で大丈夫？」

「そうですか。紅魔館を何とかして下さい」

何故か出る敬語

「クロノなら大丈夫よ」「でも……」「大丈夫だって霊夢」「相性もい  
いだろ」

やたら信頼される理由は何でかな？

「任せて下さいー！」

正直に言おう、めっちゃ怖い

「それじゃあ行つて来ます」

再び鎖の羽を生やして音速で動く

さつき霊夢が言っていた三人を無力化すればいいだろう

何人参加していたんだ？

周囲は死屍累々、気絶しているのが多すぎる

確かに結構眩しかったけど……

永遠亭らしき物があった

「お邪魔しまーす」

「……」

前回みたいにナイフが飛んでこなこて良かった

ふすまを突き破って奥に行く

悪気はない、ただやりたかっただけだ

目が赤い兎の耳が生えた人が来る

この表現変人にしか聞こえない

分身したすごーい

「コイツが幻覚を見せるヤツか……」

たぶんあっているだろう

鎖の操作をオートに変える

その瞬間、何か柔らかいものに鎖が刺さる音がした  
手に魔力を巻きつけて触れる

視界が少し良くなっただけだ

つまり異変を起こしたのはこの人じゃない

残り二人の内のどちらかだ

ふすまを突き破りながら奥に行く

「ここは？」

本で視た宇宙に似ていた

唐突に床がなくなっていく

「は？」

飛んできた矢が首筋をかする

反応できなかったら刺さっていた

「あなたが永琳さんですか？」

「いきなり名前ですか」

「魔理沙が下の名前だけしか言ってますませんでしたから」

笑って言うが、コイツ絶対気が合わないと思っていた

「殺らせてもらいますよ」

「そう……禁薬 蓬莱の薬」

小型の弾幕がたくさん飛んくる

そして魔法で強化された矢が飛んできた

その矢が分裂する

「オーバーバーサーク」

身体が制御ができない代わりに身体強化などができる切り札を切る

「コフツ」

大量の弾幕を破壊した後、血を吐く

我ながらかなり雑かったのだろう

「意外と無茶したようね」

「そろそろ終わりです」

二本の大振りのナイフをだす  
これはただ硬くて軽いだけの物だ  
向こうは弓を構える

「ハア！」

音速で動く

片方のナイフで矢を弾き、肉薄する

後ろを確認していたら結果は違っただろう

弾いた矢が心臓に刺さると思っていなかったから

「追尾式？」

体制を崩す

「せめてこれでも食らえ」

鎖をさして自分を永琳に引き寄せる

能力を起動し、無効化する

反応は二つ、結界と異変の術式

この二つが解け

回し蹴りで気絶してくれた

「降りよ」

永遠亭から出ると空は赤かった

「紅魔館のヤツか」

「じゃあ僕は赤い霧を消すかな」

◇ ◇ ◇

「どうやらクロノは勝ったようね」

「だな」「そうね」

夜が終わったのを確認して安心した

もしクロノが負けたら薬の洗脳や霧の湖からの移動などでかなり

不利になる

「ふう」

また今度お礼を言おう

紅い霧が発生する

「始まったね」



「手分けして退治しよう」

「そうだな」

「私と魔理沙は咲夜とレミリア、華仙はパチュリーと小悪魔これでいい？」

「「意義なし」」

門番を倒して突撃する

「神槍 スピア・ザ・グングニル」

「幻符 殺人ドール」

入った瞬間見えたのは

大量のグングニルだった

全員に渡した符が剥がれた

「私達が相手するから華仙は先行って」「わかった」

「紅符 不夜城レツド」

「霊符 夢想封印」

「恋心 ダブルスパーク」

夢想封印は符をばらまくために使い、ダブルスパークは気をそらすために使う

七色の弾幕に二つの光、紅い十字と、綺麗な光景だろう  
巻かれた符にレミリアが引つ掛かる

咲夜に針や星型弾が飛び回避行動を繰り返して三十秒

「すみませんお嬢様」

「霊符 封魔陣」

「恋符 マスタースパーク」

しっかりと、とどめを刺す霊夢達だった

◇ ◇ ◇

「ふう、終わったわね」

後ろには倒れたパチュリーと小悪魔がいた

「霊夢の方は大丈夫かな？」

「後は目的を調べるだけね、大した事はないと思うけど」

レミリアの部屋にきた

「あったこれね」

「参加した人数からして永遠亭を中心にして参加した人に利益を与えるような感じだと思うけど……」

「クロノがいなかったらまずかったわ」

結論だけ言って終わった

◇ ◇ ◇

「もうやけくそじゃあああああ!!」

音速で飛び回っても終わらない

永琳に刺された心臓を治すのに魔力を食われ、無効化にも食われ、飛び回った反動で壊れた鎖を直すのにも食われる

魔力結晶の残量ももう少ししかない

約五時間後

「終わったああああ!!」

「あああああ!!」

魔力が枯渇して落ちた

ボックスからパラシユートを出して落下する

魔力がないので歩いて帰った

◇ ◇ ◇

「お帰りクロノ」

「今日は疲れたから寝るよ」

「あつ、うん」

「それと…ありがとう」

「？」

何かお礼を言われるような事はしていない

もし僕が自分勝手に生きる生物ではないのなら分かっていたと思う  
う

「お休み」

今日は7時におき、永遠亭で三時間、無効化に五時間、魔力の回復に一時間、

精神的に疲れて歩くのに三時間かかった

眠たい

そう言えば何で僕は生きているのだろう  
そんな些細な事はいいや  
今を生きる、それだけでいい  
三日目が終わった

## 月の宴

四日目が始まった

「クロノ、起きたか?」「おはよう霊夢」

「昨日何があったか教えてほしいのだけど」

「分かった」

「昨日あったことを全部話していた

その後、大問題が起きた

こここの部分です

永琳を倒した後の話

「あれ、永遠亭攻略に三時間使ったなら何であんなに遅かったの?」

「紅い霧を消していたけど」

「……何で?」「え?」

「あの霧レミリアの魔力供給がなくなったら消えるけど……」

「……」

「マリオクケツシヨウノザンリョウガナクナツタノハ?」

「ただの勘違い」

「O b a b a s a——あふん」

顔に符が飛んできた

オーバーバーサークが消された?

「はいそれ禁止」

「すみませんでした」

「そろそろ永遠亭に行きましょう」

「え?」

何で? 訳が分からないよ、何で敵陣に突撃するの?

「そう言えば言っただけじゃなかったわね」

心を読めるの?

「異変を起こした人が宴会の場所と材料を提供するの」

あつなるほど

罰としては結構重いし

毒を盛られない訳がないよね?

「クロノさんおはようございませす」

「あつ妖夢さん」

タイムミングわつる

「霊夢くまだかー」

「畜生」

結局、霊夢に引つ張られていった

「昨日突き破ったふすまが直っているのはスゲー」

宴会が始まった

「そう言えば華仙は？」

「用事で来ないそうよ」

そして用事って何？

「お前も飲むか？」

「未成年なのでちよつと」

お酒を誘うな

一応これでも十六ですよ

「散歩に行つてくる」

昨日は景色を見ていなかったし

竹の葉の隙間から光はキレイだな

野生の兎がいた

小動物ならけつこう何でも好きなので人参をあげていた

純粋な可愛さがとても好きだ

「そろそろ戻るかな」

後ろを振り向くと竹林が続いていた

「ヤバ」

いくら戻っても景色が変わらない

状況を整理しよう

魔力は永遠亭にある結晶に送るようになってる

竹にハンカチを巻いて歩いて帰ってもそこに戻る

周りに人はいない

つまり

「詰んだ」

ハンカチを巻いた竹のところ座っている今の状況が完成する

「こんな所で何をやっているの？」

「……」

知らない人がいた

素直に迷子とも言えない

しかもこの人魔力が霊夢なみのヤバい人だ

「誰ですか？」

「私は幻想郷の賢者八雲紫よ」

「僕はクロノです」

「あなたがクロノ？」「えっと……はい」

「今何をやっていたの？」「……散歩で同じ所をぐるぐると」

「正直に言おうと」「迷子になった」

「つぶ」

「笑わないで下さい」

「イヤだって一人で永遠亭攻略した人が迷子なんて」

「話を換えましょう」

「結界の外について教えてほしいのですが」

「最近では機械技術が発達してかなり平和よ」

「えっ！」

機械か……

あんまり詳しくないな……

「そろそろ帰ります」

「迷子なんだよね？」

「……忘れてました」

「じゃあこれに入って」

空間の裂け目から目が出ているような悪意ある見た目なんです

それは

「これ……何ですか」「スキマよ」「スキマ？」

「空間と亜空間、亜空間と空間を繋ぐものよ」

「繋いだ先は？」

「永遠亭よ」「……」

嘘なら詰み、本当なら大丈夫  
迷子だし信じるしかないか

「じゃあお願いします」

入った瞬間目の前は永遠亭だった  
戻ると全員寝ていた

『先に帰ります』

手紙を書いておいた

結晶を回収して帰った

「ただいま」

誰もいなかった

「まあ、寝るか」

気づけば11時、もう寝よう

四日目が終わった

## クロノ

真つ暗な世界で急に爆発音がなる

「ここはどこだろう?」

8月3日、この日に生まれ、地獄を知った  
明るくなつた

周りに七人の白衣を着た人がいた

何故か怒っていた

「消え失せろ」

「え?」

拳銃を向けて撃つてくる

眼が覚めた瞬間だったのに反応できたこつちがすごい

『逃げなきや』

それしか考えられなかった

その瞬間、背後からスタンガンをくらった

「動け…ない……」

意識がヤバい、殺される

「俺が引き取る」

「いいんですか鬼龍さん」

そんな話をしている

でも意識が……

気づけば知らない所だった

「ここはどこだろう」

機械がたくさんあったが家事態は少し和風で変わった家だった

隣で声が聞こえる

「すみません」

「あつ起きた」

「さつきはありがとうございます」

「それとさつきは対人竜用のスタンガンをくらってよく生きていた  
ね」

「人竜って?」



「そこも知らないか」

「今からいろいろ教えるよ」

この世には人間、竜種、鬼がいる

竜種と人間が戦争していて、前回負けて戦力が約十分の一以下になつた。

人間の中に1000人に1人出てくる能力者はもつと減つたらしい

竜種は亜竜、純竜、人竜、聖竜、竜王、竜神がいるらしい

いろいろあつて1ヶ月がたつた

鬼龍さんはニートでした

「そろそろ学校行けばクロノ」

この名前は『curono』という実験の番号からきた

あの爆発音は僕の魔力が暴走しておこり

クロノン作成施設だつて

僕は鬼龍さんのクロノンだつたそうだ

「分かりましたがニート卒業してください」

僕の能力は魔力を巻いた所を外部からの魔力の干渉を打ち消す能力

「わかつたわかつた」

「とりあえずこれもつとけ」

箱のような物だつた

「これ、何ですか？」

「一言で言えば無限に入る便利な箱だ」

次の日……

「学校の手続き早すぎじゃないですか」

「いろいろ頑張つたんだよ」

「行つてらっしゃい」

「少し待ってください」

「向こうには亜竜がたくさんいるが」

「行つてきます」

鬼龍さんからもらった鎖の羽を生やす

音速つて速いな

それとこれ、センスどうなん

家から50キロぐらいの距離だった

「来い、ソルス」

天から空色の太剣、『太陽剣ソルス』が落ちてきた

「火力『弱』閃光『弱』範囲『学校全体とその周囲1キロ』除外範囲『零』対象『龍種』」

設定が完了した

「『天翔閃』」

天から光の柱が龍種を消し飛ばす

「終わった」

「終わって…ないぞ…」

「だくれ？」

「二我ら下級人竜三獣士我らは貴様に殺されかけた」  
「つぶ」

「ごめん、つい

名乗る事がそれかよ

三人揃って下級って言ってドヤツているし殺すじゃなくて殺されかけたかよ

これ絶対作者がネタ枠で入れたヤツだろ

「二貴様を殺す」

仲良しかよ

氷の粒が飛んできた

「夏にこれはいいな涼しい」

「あつ、でもうるさいから殺すわ」

鎖で頭を刺す

「二我が同士の三獣士を…一撃で…」

「今度は俺がくああああ」

「うるさい」

「くつ、後は俺一人…か…」

「だがお前の戦いかたはわかった」

「俺が負けるはずがない」

あれ、鎖が動かない？

「ハッ、お前は武器に頼ってばかりの雑魚だ。俺の武器封じの能力でお前を無力にできる」

「殴り殺してやる『竜身化』」

「人化を解いて竜の力を解放するヤツか…」

回し蹴りの体制をとる

「ハハハ、そんなの無駄だ」

グシヤン

肉片が飛び散る

鱗と……

「な、」

クロノが蹴り上げる

300メートルぐらい飛ぶ

ソルスを構える

「じゃあね★」

「あああああ」

◇ ◇ ◇

『転校生の紹介』

放送がなる

「はじめまして、クロノです七ヶ月間お願いします」

見た目だけの笑顔でごまかす

拍手がなる

いろいろありました

(外伝でやります、多分……)

カットー

「戦争、ですか」

「人間と竜種の二回目の戦争だ」

「あいつらが言ってたしな」

「あいつら？」

「白衣どものところの能力者で、未来予知だからな」

「いつから?」

「明日」

「学校休みます」

「入学以来、行ってねーだろ」

次の日……

「始まってますね」

「雑魚処理お願い」

「了解、『天翔閃』」

広範囲に竜種限定のをぶちこんだ

「俺は先に行く」

「聖竜に気をつけて下さい」

「普通に生きているから」

◇ ◇ ◇

視点変換『クロノ↓鬼龍』

亜光速で飛ぶ

「この先にはあの人がいるのか……」

竜種最強の竜王がいる確率が高い

「にしても、友達と殺し会うのはちよつとなあ……」

「まあ、いいか」

◇ ◇ ◇

視点変換『鬼龍↓クロノ』

上位人竜を潰した瞬間、強い魔力を感じた

「つく」

ナイフで弾けたが、弾丸がどこからか出てきた

「上位聖竜ですか?」

空間破壊の爆弾を投げる

真つ二つに切れた残骸が残った

「空間操作……」

「レン君ですね」

「正解、ここは通さないよ」

「竜種二位と殴り合いか……」

「では、始めましょうか僕と君の殺し合いを」

その瞬間、目の前にレンがいた

お互いの拳がぶつかり合い、クロノだけ腕が吹き飛んだ  
「身体能力では負けていますね」

「お前の体内に転移させれないが関係ないぜ」

腕を再生させる

「火力『最大』閃光『最大』範囲『ソルスの周囲』」

「『天翔閃』」

「『暴走突破』」

「『部分竜化』」

クロノのソルスがひかり、レンの身体が鱗の鎧に変わり、腕が槍になった

「『振中波』」

周囲の空間に振動が加わり、崩壊する

「つち」

クロノがソルスを投擲し、左腕を溶かした

右の槍と拳がぶつかり、二つが消滅した

「『空間断絶』」

空間をきり、作った結界を回し蹴りによって破壊された

「まずい……」

レンは切り札を切る

「『竜身化』」

クロノの腹に穴が開く

「こぶっ」

「オーババーサークが解けた……か……」

腹と腕を再生しながら状況を確認する

完竜となったレンが目の前に現れ、頭を潰しにかかる

腕で防いだが追撃で腹が吹き飛んだ

（賭けをするか……）

鎖では攻撃できない

「『一秒前の世界』」

右目の色が濃くなり、左目は灰色になる  
全ての物が消え、白黒の世界に三つの影がある  
クロノの影、レンの影、白黒のレンの影

「今からお前を破壊する」

白黒のレン、レンの鏡像に振動ナイフを投擲し、その投擲は空間断絶によって防がれた

「防御に専念しないと死ぬよ」

『天翔閃』

『空間消滅』

自信や物をこの空間から消す切り札、これでレンも鏡像も消え、  
「えっ?」

『無限連鎖』

「TYPE 無限破壊」  
インファイニットブレイカー

レンの腹に穴が開いていた

空間消滅をとき、六本の鎖が音速で飛んでくる

「引っ掛かったな」

クロノが死にかけのレンに言う

鏡像が消える

「あの鏡像、このコンタクトの効果だけどき」

「これ、色を替えるだけなんだよな」

「えっ?」

「要するに……」

レンに鎖が巻き付く

「こういうこと」

血しぶきが飛んだ

そして二人の戦いは終わった

『聞こえるかクロノ』

「うん」

『今すぐ境界に来てくれ』

「理由は?」

『護衛』

「訳がわからないよ」

◇ ◇ ◇

視点変換

『クロノ↓鬼龍』

「よう、久しぶり」

「久しぶり」

「今から殺し合いか？」

「そうなるね」

「じゃあ」

鬼龍が持っていた剣で両断する

「相変わらず物騒ね」

「時間操作は時空剣でもむりか」

「神話級を当たり前のように使わないで」

「強いからいいだろ」

「まあ、そいだけど……知っているとおもうけど、私が竜王よ」

「知ってた」

「だから、本名を使わないで」

「了解」

「始めようか竜王」

「殺ろうか半竜半鬼」

二人は消滅した

亜光速ではなく、光速の世界で……

「時止めは使わないんだな」

「消費がすごいからね」

竜王は魔力弾を大量に使う

鬼龍は魔力弾全てに弾丸をぶつける

「イヤ〜ロマン武器のリボルバーも普通に使えるね」

「魔力妨害と真っ直ぐ進む効果をつけただけでこうなるとは」

「加速もあるよ」

「いいません」

「無限に魔力弾、出てくるね」

「全魔力使って、時を戻せば連発できる」

「納得」

『閃龍覇』

時間や空間を刃にした時空剣の必殺技、十分後に使用できるはずだが……

本来の力を遥かに超えた破壊が起こり、

時空剣が砕け散った

「物は大事に扱いなさい」

「うわく生きていたか」

「この生命力ゴキブリめ」

鬼龍は必殺技の反動を無視して最大の力を出させることができる

よって時空剣は壊れた

「そろそろ決めるか」

「そうね」

その瞬間、

鬼龍と竜王の腹に穴が開いた

「こぶっ」

再生したが、二人は警戒する

和服を着た鬼だった

「今から審判をする、脳筋ども」

「はっ」

◇ ◇ ◇

視点変換

『鬼龍↓クロノ』

『ということだ』

「わかった」

『内容は世界に境界を造ること』

『その為に神をつくる』

『という訳で創造系能力者の俺という事だ』

「あくなるほど」

「何で僕？」



『神になる前に影と戦闘になるから』

「影？」

『要するに……俺の身体能力を強化されたヤツ』

「無理だよ」

『大丈夫大丈夫』

「もう着きます」

『オケオケ』

クロノが着いた

「始めましょうか」

カッター

「影さんエントリーです」

「帰れ」

「帰れ」

「消えろ」

「最後こわ……」

全員が飛ぶ

竜王が消える

「は？」

「使えね」

「マジのゴミ」

カッターしますか……

「おい」

「何でや」

「訳がわからないよ」

後書きで書きますから

「」「は？」「」

影さん……しゃべれたんだ……

「止めろよ」

「絶対にな」

「ぜーたいにな」

という訳でカッター♪

「「あー」」

そこにはクロノと影の死体があった

「あつこここまで飛ばされんの」

「マジかよ」

死体について反応ナシ？

◇ ◇ ◇

視点変換

『クロノ↓クロノ』

「いろいろツツコミたいのだが？」

「作者からの情報だよー★」

「あっアリカ」

「つで、今回は白髪青紫の目？」

「死ぬシーンが飛んだ理由は？」

「投擲が1ヶ月出来ていないかららしー★」

「削るところもつとあつただろ」

「どうでもいいけどー★」

「何？」

「今すぐ起きないと死ぬよ★」

起きると目の前に針があつた

「霊夢……」

反撃しようとした瞬間、霊夢が消えた

5日目が始まった

## お前絶対ぶち殺す

前回のあら不思議

「何それ」

目が覚めると白衣に囲まれた。「あら不思議★」

助けてもらった。「わく不思議★」「何でだよ」

竜人と戦い「おく不思議★」

自爆し死亡し「とつても不思議★」

「カットシーン出すな」

以上、作者 アリカ クロノの前回のあら不思議でした

「巻き込むな」「わく不思議★」

◇ ◇ ◇

「霊夢……」

5日目が始まった

二本目の針を交わし、ソルスを構える

「ふっ」

霊夢が少し笑い、いなくなっていた

心当たりは一つある

「永遠亭……」

「絶対潰す」

「霊夢、霊夢、」

外から華仙の声が聞こえる

「クロノ、霊夢は？」

「今は……いない……それと永遠亭を潰してくる」

「私もいくわ」

「わかった……鎖に捕まって」

「その前に、私も参加するわ」

「紫……」

「昨日はありがとうございました」

「とりあえずスキマに入って」

「ありがとうございます」

目の前が迷いの竹林になっていた

「天翔閃」

何も起きなかった

「僕が雑魚処理します、二人は永遠亭に入ってください」

二人に鎖が巻き付く

「どういうこと？」

「こういうこと」

二人をぶん投げた

「僕も働きますか」

目を瞑り、

「生命探査」

雑魚処理を始めた

「レミアアさんじゃないですか」

三日前にあったレミアアスカーレットがいた

「神槍 スピア・ザ・グングニル」

いろいろありました

「行きますか……」

鎖が使えないので、走っている

右手にソルス、左手に結界銃を持つ

状況はヤバい

一昨日に魔力がゼロになり、鎖が反動で使えない

「断命剣 命想斬」

その瞬間、刃の光が見え、左腕が落ちていた

「霊符 封魔陣」

「恋心 ダブルスパーク」

霊夢、魔理沙、妖夢かいた

「これ無理だ」

「『ファイナルバーサーク』」

意識が落ちた

説明しようファイナルバーサークとは…メチャすごい（ドヤツ）  
気づいたら三人とも気絶していた

「洗脳を解きますか」

解いた瞬間、頭痛で倒れた

後は華仙たちに任せよう

5日目が終わった

◇ ◇ ◇

『ファイナルバーサーク起動』

『目標設定：博麗霊夢、霧雨魔理沙、魂魄妖夢の洗脳解除又は戦闘不能』

『目標成功確率：約8%』

機械的な声とともにが起動する

「恋符 マスタースパーク」

全身が黒くなり、

『レーザー弾の接近、対象方を実施「天翔閃」』

マスタースパークを防ぎ、ソルスのエネルギーがなくなった

「断命剣 命想斬」

右腕も切れた

「霊符 夢想封印」

「ファイナルスパーク」

『回避不可能』

『命中すれば死亡又は戦闘不能』

『本体承認……承認完了、■ ■、戦闘を続行します』

黒が剥がれ、普段のクロノが…否、青紫だった目が金色になり、白  
だった髪が青く染まっていた

斬られた腕は再生し、右手に《無名》と呼ばれる聖剣を構える

「断魔」

ファイナルスパーク、夢想封印を斬った

「断意」

三人の意識を……斬った

「……終わった終わった……あのクソ犯罪者<sup>黒</sup>の仲間もこんなものか？」

「あの時はどうしたら被害をあいっただけに抑えたんだろう……」

「まあ、いいか……替われ、黒月」

勇者と呼ばれた者は、そんな訳のわからないことを言った

## 祝祭

「クロノ…そろそろ起きろよ……」

倒れている僕に聞こえたのはそんな魔理沙の声だった

「うっ」

激しい頭痛がする

「そこ起きるんだな」

僕も空気読めば良かった

「三日も寝ていて心配したぞ」

えっ、三日？ファイナルバーサーク起動から記憶がないな……

「あの後どうなった？」

「華仙と紫が永琳を倒した」

前回、タイムトル詐欺してしまったな

「こういう話はやめてさ、お祭り行こうぜ」

「何のお祭り？」

「クロノもお腹空いただろ？」

「質問、答えてもらっていないけど……」

まあ、いいか

「準備しとけよ」

「は〜い」

箱をあさっていると、浴衣はあった……でも僕が似合うはずないからな

まあ、いいか

白髪青紫の目、それに黒い浴衣……追加で言うとう首にヘッドホンで背中に鎖……似合わね

「ごめん待たせた〜」

「お前浴衣着ただけでそれっぽいではないぞ」

「気にするな」

「じゃあ行こうぜ」

◇ ◇ ◇

着きました

「カット便利だな」

「メタさは求めて無いよ」

「前々回よりマシだろ」

「なぜ知ってる」

「前回タイトル詐欺」

「そのネタさつきやった」

「第二話の脳筋と戦鬪きよ——」

「あくお面売ってるよ」

「話題そらすな」

「狐だ〜これにしよう」

一応買った

後にストーリーに関わることはだれも知らなかった……

「いや、知らんぞ」

「何いってるんだ?」

「というかお金どうやって稼いだ?」

「紫さんがくれたけど」

「?」

「お礼、って書いてた」

「納得」

僕の方がお礼言いたいのに……

「とりあえず何か食べよう!!」

「そうだな」

四日間何も食べて無いしな

「またカットだろ?」

「そうだよ」

カット

「荷物持ち、僕ですか…」

「そりゃ鎖便利だか…あふっ」

たこ焼きスゲー

というかここって海無いよな?

何でたこ焼きあるんだよ

「喉乾いたからお茶屋でもいこ」

「ここでもいいか」

ドアを開けた瞬間、見慣れた顔があった  
「つつ」

バタン!!

くっそ、油断した

「どうした?」

「魔理沙、一つ、聞いていい?」

「なんだよ」

「第二話、『脳筋と戦闘興がいつぱいいました』という発言をした理由の一つであり、第三話に心臓ぶち抜いたヤツで四話に友達を薬物で洗脳し、第五話の最後に友達に自分を襲わせ、第六話にタイトル詐欺をする原因になったヤツが今入ろうとした店を経営してた場合、どうすればいい?」

「わかったわかったから他のところいこ」

何気に作品一の長文だったな

「そういえば霊夢は?」

「行くか?」

「?」

カットッ

「いや、店やっているとほ思わないだろ」

まあいいや

「霊夢」

「魔理沙じゃない、いらつしやい」

「来たぞ」

「ありがとう、クロノは?」

「たこ焼き食ってたぞ」

「良かった」

心配されてたんだろう

「お邪魔します」

「いらつしやい、これ食べてみて」



「饅頭？」

「いただきます」

「っあ、普通にメチャ美味しいはこれ

「美味しいです」

「ありがとう」

霊夢の意外なところ発見

こんな平和が続けばいいな

「後で花火見に行こうよ」

花火ですか…

少し、懐かしいですね

2、3世代ぐらい前にしろさんたちと行ったな

「ちよつと、お祭り回って来ます」

「行ってらっしゃい」

カット

「この前こころ辺を見渡せそうな場所を見つけたけど行きますか？」

「花火の時にしろ」

「かくかくしかじからへんです」

「説明するき無いだろ」

「無いよ」

「始まる前ぐらいに集合しましょう」

「OK」

「霊夢も呼んで」

カット

「もう始まるけど大丈夫だよな？」

パーン

始まったわ

遅いですね

◇ ◇ ◇

視点変換

クロノ↓魔理沙

「遅いわよ」

「すまんすまん」

パーン

「始まったわこれ」

人影が見えた

「ごめん待たせたクロノ」

横で霊夢が「本当によ」と言っている

その瞬間、その人影が倒れた

「クロノ？」

たどり着いた瞬間、驚いた

◇ ◇ ◇

視点変換

魔理沙↓クロノ

頭が痛いな

もうそろそろ来てもおかしくないのに

目の前で光る花火はキレイだ

懐かしいし楽しい、そして見ていると悲しい

どうしても、自分に似ているから

そういえば、寝た時間はたった三日間だけだったな

ちよつと、眠いわ……

## 鬼と破壊神

起きた……

いや、ココドコ？

花火スポットでぶっ倒れたやん

何でこんな真つ暗なんだよ

地面凸凹しているし!!

精神世界でもこんな場所ないぞ

アリカ居ねーし

「ちよつと、お前が気になったのでな」

知らねーよ

お前誰だよ誘拐犯!!

「帰っていいですか？」

「断る、私の質問に答えてもらう」

「断る、帰らせてもらう」

「何故封印を解いた？」

「無視ですかそうですね。それと解いてねーよ、理由もねーし」

「知らぬか、向こうでは全ての封印が解かれて暴れているぞ」

「知らねーよなんだよさっさと帰らせろ」

「……フツ、面白いなお前私と似ているな」

「やっとなるくなってきた……お前は……」

◇ ◇ ◇

視点変換

クロノ↓華仙

「クロノが拐われたか」

まずい

クロノなら大量の霊力を止めれるのに……

無限地獄にあいつがいる

クロノもいる

友達として助けたい

私が離れると戦力が減る

だから、私にできることだけをやる

「任せたよ…クロノ…」

◇ ◇ ◇

視点変換

華仙↓クロノ

「ここに体を持つてくるとは流石だな」

「博麗の巫女と同じようだな」

「華仙…」

本当は少し違う

華仙はあんなヤツとは違うし、多分体を持ってきたのも華仙だろう  
決定的な違いは『悪意』だろう

悪意の量が別人のように多い

否、別人なんだろう

「今からお前をぶち殺す!!」

「ハッ、じゃあ殺ってみろ」

「ここでお前をぶち殺す!!」

「ここでお前を喰らう!!」

「いざ、」

「勝負」

鎖を簡単に破壊され、拳をかわし、

「オーバーバーサーク」

腹部に回し蹴りをくらわせた

数メートル翔ぶが、傷はついていない

「チッ」

「その程度か?」

腹パンをくらい、吹き飛ばされる

「コフッ」

目の前に柱があった

鎖で破壊したが、目の前にいる

両手にナイフを持ち、防御したが、そのナイフが砕けた  
華仙の手は、僕の心臓を破壊していた

気がつけば、大量の白骨が同時に襲ってきた  
動けない、死んだな

——でも、生きたい

——友達といたい

——だから、何を使つても死に抗う

『仮装人格、クロノの生存意思を認知、本体承認済み、起動』

「どういうこと？」

訳がわからない言葉の後、意識が落ちた

◇ ◇ ◇

「自己紹介するぜ」

それは体格が良くなり、白髪で髪は長く両目が赤く、右目に紋章が……今出来たクロノだった

「俺はクロノ、破壊神と呼ばれた人間だ」

クロノと名乗る者の近くにあった白骨が全て赤い塵になって消えた

「フツ」

背後に回り込んだ華仙が心臓を破壊しようとしたが、

「おせーよ」

回し蹴りで吹き飛んだ

「なっ」

「自己紹介も終わったしさっさと終わるか」

右目の紋章に触れ、

「封印解除、設定時間二秒」

「とりあえずお前消えてろ単体消滅モード起動」

「じゃあな」

◇ ◇ ◇

クロノ（仮）は空を飛び、

「封印解除された結果を消滅させる方が手っ取り早いか……」

（世界ごと破壊してもいいがあいつが可哀想だしな……呪いの解除も出来るかもしれないし……）

異変が終わった

「やくぱりいたわね」

「いたよ紫、久しぶり」

「久しぶり、とりあえず、質問が山ほどあるけど…答えてくれる？」

「何だ？」

「あなたとクロノの関係、そして九日前から起こり続けている異変について」

「後者だけなら言える」

「じゃあお願い」

「以前起こった異変が起こること…それが今の異変、過去に起こったことがもう一度起こらないとは限らない、複数ある世界の内の一つのパターン、ここまで言ったら分かるだろ」

「用は『ただそうなるようになっていた』ということね」

「あと一つ、聞いていいかしら？」

「いいぞ」

「アリカ、という存在について」

「…言えない」

「そして何でそれを知ってる」

「言わない」

「これだから管理者は嫌いだよ」

## クロノという名前

「これだから管理者は嫌いだよ」

「一応聞くけど、クロノを戦力として数えていい？」

「別にいいぞ」

「換わりに、《呪い》を解くのを手伝え」

「はいはい」

◇ ◇ ◇

（あれは楽しかったな）

彼の頭に浮かんだ光景は、復讐を済ませる時だった

「どうして殺ったのですか。理由によっては入学出来ませんよ」

「本当の親の存在を知り、暴行や虐待を繰り返す偽りの親に復讐をしたかったからです」

「じゃあ寮の紹介をします」

（ここの基準おかしいな）

「ルールを説明します」

カットですね

まとめるとランクが高い順から0〜5まであり、授業、依頼を受ける

学費がなく、逆に給料がもらえる

依頼、テストでいい成績を出すとランクが上がる、以上だ!!

◇ ◇ ◇

「君はランク5から出ない方がいいですね」  
「？」

「目立ち過ぎるからです。君の右目の紋章は封印です、依頼を受ける時は『黒月』と名乗って下さい、クロノさん」

「分かりました」

◇ ◇ ◇

部屋はランク5なのにキレイで一人部屋だった

「親切だな」

その瞬間、ベッドの布団がモゾリと動いた

「!?」

その警戒はすぐに解いた。何故なら、

「ふきゅ〜」

そんな、かわいらしい声が聞こえたからだ

「人口竜?」

「ふきゅ?」

(めっちゃかわいいは、和む〜)

「すみませーん」

ドアの方からそんな声がした

「こんにちは」

「はじめまして、ランク5リーダーの唯、今日からよろしく、クロノ君」

「はじめまして、唯さん、質問したいのですがあの人口竜は何ですか?」

「ふきゅ?」

やっぱりかわいいは

「それは人を選ぶ竜だよ。主の行動で世界が変わる確率が高いとやってくる」

「きゅ〜」

元気だな〜

「少し、テストがしたい…ついて来てくれ」

「分かりました」

◇ ◇ ◇

「あのゴーレムに攻撃してください」

身体強化でぶん殴った

「能力は何ですか?」

「身体強化です、右目の紋章でもう少し強くなりますが危険なのでやめます」

嘘である、前回見てこい

「ついでに唯さんの能力は?」

「結果操作です」

「ふきゅ〜」



あれ、いたの？

「ついでにその子は主と同等の力を使えます」

「スゲー」

「一つ、依頼を一緒に受けませんか？」

「分かりましたオケです」

◇ ◇ ◇

それから3ヶ月が過ぎた

高難易度の依頼を受け、『黒月』の名前でランク4にならないようにする

お金はランク5の為にこつそり使っている

具体的には古い電化製品や魔力製品を能力でかたづけ、高級な物と交換する

逆に何で誰もきずかないのだろうか？

基本的にランクは簡単にかかるような物ではない

そんな話はどうでもいい

今は気楽に買い物中だ。外が騒がしいがどうでもいい——  
そう思っていると

『UGGGGA』

後ろに鉦を振り下ろす悪魔がいた

「うるさい。今レジに並んでいるから黙って」

「きゅ〜」

鉦が触れる直前、その悪魔はバラバラになって消えた

周りから生暖かい視線が向けられる

その直後、さつきよりデカイ悪魔が壁を破って入った時——

「断存」

——それは消えた

それは金色の瞳で青い髪の《無名》と呼ばれた長剣を持った者だった  
た

「お前らの安全は保証され——」

歓声があがる

カッコいいけどさくカッコいいけどここスーパーだぞ恥ずかしく

ないのか

外に出てさつさと悪魔を殺そ……

いや、何で悪魔がいるんだ？

先導型の能力でテロか……

まあ、いいや潰そう

右目の紋章に触れ、大量の悪魔が消えた

それはいいが、問題は勇者がこれを見ていたことだ

幸い、消えたのは遠くの悪魔だけだったから良かった

その瞬間、上から光に照らされ、

「多重結界300」

300の結界が簡単に破られた

この火力は『生け贄シリーズ』か『復讐シリーズ』だろう……多分復

讐……

「ウィンドイー——」

双剣の風魔法をぶつけようとしたが、

「断罪の鉄槌」

聖属性最上位魔法で終わった

光の先にいたのは……

「さすがにこれはキモい」

悪魔の顔でムキムキの全身ボディを持った天使の羽と輪がついた

ヤツだった

「少し、手伝ってくれるか？」

「いいですよ」

時間稼ぎ……勇者の必殺の為だ

「黒死流」

黒い風があの変なヤツに向かう

風属性しか使えないため、自分で作った

エネルギー弾が来る

これでヘイトはかえた。後は任せた

◇ ◇ ◇

視点変換

『クロノ（黒月） ↓勇者』

「――我が復讐、ここに來たる」

「――生と死」

「――安樂と苦痛」

「――聖と闇」

「――己の罪を全て数えよ」

「――万象に刻め」

『復讐の時』

詠唱が完成すると、黒い玉ができ、少しずつ明るい色になっていく  
全ての属性を含んだソレは速度を上げながら飛翔する

天使とも悪魔とも言える怪物に触れた瞬間、花火のように爆発した

◇ ◇ ◇

視点変換

勇者 ↓???

「1号が殺られたか……」

ソレはもはや死地とも言えるランク5の殲滅された土地にいた

「見た目をのぞけばそれなりに良かったのだが……」

「どうでもいいか」

◇ ◇ ◇

視点変換

?? ↓クロノ（黒月）

後日、呼び出しをうけた

「君をランク2にする」

「全力で断ります」

「何でだ？」

「落ち着かないから」

「ランク2の方が予算も多いし部屋も広いしその他もろもろいいんだぞ」

「予算は自分で何とか出来るし部屋は高級な電化製品や魔力製品を全員のところに配置しましたし差別がないし友達が多いし授業はしっかり受けれます」

「あれお前だったのか」

「？」

何言ってるんだろコイツ

「ランク5の寮がランク3より豪華だって噂が流れてるんだよ」

「……」

「まあ良い、指名依頼だ」

「何の？」

「俺の所属する組織であるレギ——」

「世界最高じゃねーか」

「そのグレゴ——」

「決闘王者じゃねーか」

「決闘だ、三ヶ月後、それまでに準備してろ」

「拒否券はないですね分かりました」

◇ ◇ ◇

(クンクンクン、これは罨の匂いがします)

(実際似たよーなことで親が死にました)

五歳の頃、無実の罪を擦り付けられ、先代勇者に両親が殺された

両親は優しく、クロノの能力の暴走で命をかけて右目の紋章で封印

した

その勇者の息子が今の勇者であり、俺は今の勇者の親の仇というこ

とだ

(とりあえず、武器を集めますか)

◇ ◇ ◇

「本当にあいつが犯罪者とは思えない……」

(上からあいつには殺人、奴隷売買、その他もろもろあると言われて

いるがな)

(今度の決闘で分かるだろう)

クロノも勇者も知らなかった。今、ランク4以上の依頼でクロノの

暗殺が提示されていたことを……

◇ ◇ ◇

(最近よく襲われるな……)

買い物していたら狙撃されたり、武器を試していたらナイフがとんできたりしていた

(実験出来たからいいけど……)

無論、誰も殺していない

今の装備は羽型の鎖、瑠璃色の双剣に空色の大剣とただ硬いだけのナイフ、最後に結界銃だった

(明日の決闘、大丈夫かな……)

◇ ◇ ◇

『まずは、東門、決闘において最強の男、グレゴリー』

拍手、歓声が起こる

『西門、ファイブの光、黒月』

『それでは試合、開始』

「天翔閃」

初撃奇襲の一撃、光の柱に対してグレゴリーは魔力の三割を使った結界で防ぐ

「中々やりおるな、少年」

「ありがとよ」

グレゴリーの持った空間拡張つきの箱から槍先のようなものが大量に出てくる

「サイコキネシス……か……」

背中に鎖、両手にナイフをもつ

「暗闇の瘴気」

黒い霧が広がる

「ホーミング、開始」

「TYPE：インフィニットブレイカー」

超音速の絶対破壊の鎖は、槍先を破壊しながらグレゴリーに近付く槍先は鎖を破壊しながら防御にまわる

インフィニットブレイカーがきれる頃には、槍先は全てなくなっていた

「ウインドイーター」

双剣から放たれる風の刃は当たる直前に金属の粉によって防がれ

た

「第二ラウンド開始、だ」

大量の粉はクロノを囲い、襲った

「いえ、問題ないですね」

能力を隠し続けた結果だ

(約束の、人に対して使わないのは守っているし大丈夫かな)

「ふっ、その余裕はどこから来るのかね」

「発言が悪役っぽいですよ」

粉がクロノに触れる瞬間、

(みんな消えちやえ)  
「黒死流」

粉が消滅した

「ここからは殴り合いですね」

「驚いたがその様だな」

ラウンドスリ  
「R 3、開始」

二分後、一つの影が倒れた

結果は分かりきっているだろう

◇ ◇ ◇

「何とか勝った〜」

その言葉の直後、無数の攻撃が飛んできた

「ないわ〜。暴力反対〜」

そんな言葉を無視するように攻撃が来る

観客席では約八割の人が攻撃する

(魔術で攻撃すると他の人を殺しかねない)

「風壁、多重結界」

圧縮空気の壁、無数の攻撃を防ぐ為の結界、防御は出来る。だが、

(じり貧だな……能力を使うか否か……)

簡単な話だ

能力を使えば何とかなる。しかし、約束を破ることになる

「今だ、やれ! あいつは防御に集中している。集中攻撃だ」

そんな声が聞こえた

(そうだな、やるなら正々堂々とやるか)

(やられてばかりじゃ居られねえよな)

(設定は自信を敵対している者全員でいいな)

「一方的な暴力をやめてくれませんか？ じゃないと死にますよ」

「ハッ、そんな軽い脅迫、どうでもいいな」

脅迫じゃないんだけどな〜と思いつながらべらべらうるさいヤツらを殺す準備をした

(みんな、消えちやえ)

残り二割の者は何が起きたか分からなかっただろう

未知、という名の恐怖を叩きつけられたという事実だけが残る

「気分も悪いし、そろそろ帰るか……」

一名を除いて

「ツク」

彼は試合終了から起きた出来事に怒りを抑えては居られなかった  
「何で、こんなことをした？」

闘技場の中央に降りた彼はそういった

ソレは紛れもない、本当の怒りだった

「正当防衛」

「じゃあお前の罪は？」

「？」

「殺人、奴隷売買など」

「またあいつのか……」

「あいつ？」

「偽りの父」

「ちよつとした昔話を聞いてくれ」

「わかった」

◇ ◇ ◇

本当の両親は優しかった

偽りの父の能力、《罪を操る程度の能力》、これのせいで先代勇者に殺された

その後、両親の仇に引き取られた  
最悪だった

偽りの父からは強制労働、母からは虐待、兄からは差別、本当に最悪だった

ある日の事だった

母からの虐待を受けても痛覚を感じなかった

気が付けば、手に血がついていた

「アハッアハハハハハハハハハ」

気が付けば笑っていた

その体は目が失くなり、血塗れだった

ドアの隙間から覗いていた彼にこう言った

「次は君だよ、罪を数えろ、偽りのとーさん」

◇ ◇ ◇

「という事だ」

「なるほど……」

「まあ良い、今から始めるぞ」

「少し待て」

「オツケー」

「かる！」

「この試合、ルールは？」

「タイムアタック、1分以内にお前は俺を殺せ」

「殺せなかったら？」

右目の紋章にクロノは触れる

「これを完全解放するのに1分かかる」

ま、完全解放したら世界が消滅するがな、とクロノは呟く

「そうか……」

「どのみち、お前は死ぬのだな」

「そうだが？」

「何で食いきみなんだよ」

その瞬間、《無名》が光った

そして、クロノに大量のエネルギーが入った

「これ、なんだ？」

「転生の術式、これから何度でもやり直せる。お前のそのふざけた人



生、見返してやれ」

「……ありがとう……」

本当に嫌いだった勇者が「今から世界を滅ぼす」と言っているヤツを止めようとせず、正面から向き合っているのだ

「ソレはお前が本当に満足した時だけ消える」

「……」

「長くなつたな、始めるか」

「そうだな」

「ファイナルオーバーバーサーク」

◇ ◇ ◇

「転生、という素晴らしい力は俺には勿体ないな」

精神世界で彼は考えた

この世界は昔、黒月が過ぎた希望の存在しない世界と似ていた

しかし、この力を使えるのは自分だけだった

この力を使える自分<sup>他人</sup>を作り出す

「あれ、これ簡単じゃね」

仮想人格、自分と同じ、そして違う人間

「名前は……」

その時、『依頼を受ける時は《黒月》と名乗って下さい』頭の中にその言葉がまわった

「助けてくれたヤツの言ったことだ。俺は黒月、と名乗ろう」

黒月は苦笑し、

「お前の名は《クロノ》俺が掴めなかった未来を掴め」

この瞬間、仮想人格《クロノ》が生まれた

◇ ◇ ◇

「ごめんアリカ、久しぶりに能力使ったから1ヶ月は寝ていたクロノはどうだ？」

「ヤバいの☆」

「何があった」

「感情（を失って）暴走（した）☆」

「それ、ヤバくね」

物語は1ヶ月前に遡る

## 白い世界

「……頭痛い」

最近は常に頭痛だ

「昨日、何があつたつけ？」

華仙つばいヤツと殴り合つて心臓を潰され、生存意識がなんやかんや

(とりあえず、起きるか)

(何か首の後ろがかゆいな)

触ってみると……

「は？」

髪が延びていた

『アリカ、僕、どれくらい寝てた？』

『八時間くらい？』

八時間か……そうなると、

「心臓潰されたら髪が伸びる!？」

『バカでしょ☆』

それくらいしか……

『クロノの脳はそんなに小さいの☆』

「この話はもうおしまい!!」

とりあえず博麗神社に行く!!

帰りました。怒られました。スミマセンでした

◇ ◇ ◇

「そろそろ、幻想郷を案内した方がいいのではないのでしょうか？(二回目)」

妖夢さんが久しぶりにそう言った

「そうね、クロノ、今どこを知っている？」

「永遠亭と紅魔館……あれ、この程度ですね」

強いて言えば無限地獄……

「よろしければ、白玉楼にご案内しましょうか」

「確かにいいな」

魔理沙が苦笑する（というか魔理沙、いたんだ）

「お二人もどうですか？」

「もちろんだぜ  
「もちろん」」

二人が声を揃える

「白玉楼？には他に誰がいるのですか？」

「私と霊、幽々子様ですね」

幽々子様？あく主か……というか従者の人、短髪多くない？（鈴仙除く）

白玉楼かく。幻想郷の中で作者が一番好きなどころ

というか妖夢さんが一番好きだったような

「善は急げ、行きましよう」

「そうですだな」

◇ ◇ ◇

妖夢ファンの作者です

クロノが白玉楼にいる間に精神世界で解説します

「どっから突っ込めば……黒月だ」

「本編まともに登場、アリカだよ☆」

「はあ、まずは謝罪だな」

謝罪？

「第五話、第九話について、何か」

ストーリーにほとんど関係無い物を長々と書き続けてすみません  
でした

「よろしい」

「あつこの大切なところつてなに〜？」

鬼龍、アリカ、黒月の存在と転生の術式、仮想人格クロノ……それと  
……何だろ……あつ、オーバーとファイナルの事……ぐらい……

「1割もなかったね☆」

アリカうるさい

「許す、かわりにこれから最低1500字以上な」

妙に優しい

まあ、解説します

鬼龍はパスして黒月からです

転生の術式のため、複数の世界を渡っています

能力は任意の物質を消滅させる程度の能力、過去に親が右目の紋章で封印しました。その能力を圧縮したものがクロノの無効化の能力、クロノが現在使っている武器は黒月の使っていた武器をもとに鬼龍が作ったものです

「紛らわしいは」

ごもつともです

本体使用とは、クロノの本当の人格、黒月と体の所有権を交代することです

オーバーとファイナルは、黒月がオーバーを作り、勇者がファイナルを作りました。(オーバー解説済み)ファイナルは勇者の人格の影と交代するものです。

「あと300字くらい☆」

あれ、今回からですか？

「当たり前だな」

じゃあクロノのほうを書きます

◇ ◇ ◇

1500がなんやかんや聞こえた気がする……

まあ、いいや

「ごめん、少し寄り道するから先行っててくれ」

「分かりました」

霊夢と魔理沙と別れる

◇ ◇ ◇

視点変換 クロノ↓魔理沙

「やっぱり、あんたも気付いたわね」

「あいつの性格や中の魔力とかだな」

祭りの時と「髪が伸びたく」って言っていた時の性格の違いはかなり目立ったし、それ以上に元々は魔法使いである私の3分の2くらいだった魔力の量が何十倍も増えていた

「たった1日だけであんなにかわるとは言えないよな」

実際、魔力は魔法や特殊な訓練で少しずつ増えていく

「多分、解けた封印を一瞬で消したのもクロノでしょうね」

「そうなるな」

（あいつ、封印の時だけ居なかったんだよな）

「あの時、クロノはどこで何をしていたと思う？」

「私には分からん」

「それと、出てきなさい紫」

空間からスキマが出てきて、八雲紫が出た

「居たのかよ……」

魔理沙は不快そうな表情を作る

「居たわよ」

紫が微笑する

「あんた、クロノについて、何か知っているでしょ」

「ほとんど個人情報なんだけど……」

「言いなさい」

霊夢がお祓い棒を構える

「彼は、作られた存在よ」

「それって……どういう事だ？」

「彼には主がいて、逆に主の存在について、彼は知らないの」

「？」

ますます訳がわからない

「彼の主はとある目的を彼にさせている。しかし、彼は何も知らない

のよ」

「その主は誰だ！何でクロノに教えない」

溜まった疑問を一度にだす

「あなたたちも一度、助けてもらっているはずよ」

「それってどういう……」

そこに紫は居なかった

## 僕には分からない①

あれから数日後、前世の記憶が思い出せないことに気付いた  
「どう死んだんだっけ」

思い出せない

考えると白いもやがかかって来る

か……いや、き……思い出せない武器をくれた人

まあ、いいか……

そんなことよりお出かけだ、霊夢が地底に行くらしい

最近よく怨霊が地上に現れるそうだ：霊夢も最近それで忙しそう

そういえば、幻想興って他の世界と何が違うような……

「そろそろ行くわよ」

「分かりました」

◇ ◇ ◇

わーいついたくおーんせーんだー

ところで皆さん、温泉に来るとテンション上がりませんか？

後でアンケート取りますね

「ここが目的地じゃないわよ」

温泉を見てテンションが上がる僕の雰囲気を見て霊夢がそういう

「そーなのかー」

「何で人食い妖怪風？」

いや、昔の友達が言ってたからだよ。名前を忘れたけど（ルーミアである）

「何ででしょうか」

平和だなく

「目的地はここの下」

大きな間欠泉の穴が見える。これの下？

「高所飛び降り自殺大好きですか？」

つい最近、冥界から帰る時に落下していった

そういえば幽々子さん、どっかで見たことあるような……

「あんた馬鹿？」

違うな!!否定する!!

「質問を質問で返さないで下さい」

目の前には霊夢がいなかった

「追いかけますか……」

やることは決まっている。要するに地底にヒモなしバンジーだな  
!!さっさとやれよ!あくしろよ!!

「はあ」

背後から気配を感じる

「誰?」

昔と同じく短文の連打だ

「あれ、気付いちやった?」

そこには薄い緑の髪に黒いおしやれな帽子をかぶり、奇妙な目蓋を  
閉じたような見た目をした球体を着けた少女がいた

「誰、ですか?」

その少女はにっこり笑い、

「こんにちは、私は古明地こいし、ちよつとお散歩していたらあなたた  
ちを見つけてついて来ていたんだー」

「こんにちは、僕はクロノです。最近よく怨霊が出るらしいので霊夢  
と一緒に調べに来ました。置いていかれましたが……」

自己紹介を済ませる

「あくお姉ちゃんが言ってたー」

この人、アリカに喋り方が似ているなく、アリカとは違って☆は  
付けないけど

「怨霊について、何か知っていますか?」

「知っているよー」

そうですか

「最近、旧地獄の怨霊が減ってるのー」

「外に出たからですか?」

そういうとこいしさんは、

「居なくなった数と外の数が全く合わないらしいのー」  
「えっ?」



全く？・どういう事？

「早くしないと霊夢に追いつけなくなるよー」

「あっ、そうでした」

鎖の翼を開き、音速で飛び降りる

この一つの異変の答えを探す為に

## 僕には分からない②

二回目の飛び降りヒヤッハークロノだ

◇ ◇ ◇

前回のあら不思議

「おい、クロノのやれよ」

断る!!

「短文読解（笑）、アリカだよ☆」

ちくせう、否定できないぜH A H A H A。作者だ

「前回、とある学園へ☆」

「それ、俺の時。第九話」

ツッコミ放棄やめて

「断る!!」

や〜ら〜れ〜た〜

「一応言っておく、ここ後書きじゃなくて本編だぞ、何で懐かしいネタを引きずり出してるんだ？」

気分？何でたろ……

「あら不思議☆」

「懐かし<sup>懐かし</sup>い!!」

◇ ◇ ◇

（。D。）ハッ！、今懐かしさを感じたような…気のせいだったは……

絵文字面白いですね（≡、▽、≡）

どういう訳でクロノです

ところで今、相談したいことがあります。

華仙や博霊神社であった萃華さんと同じ鬼の打撃を回避している途中です

「やめて下さい、危ないです」

鎖を壁に刺して、引き寄せることで飛行速度+引き寄せる速度で回避できる

まるで進○の巨人の立体○動装置のように……

「それとお酒を飲みながらはやめて下さい、心が傷付きます」

「こっちは余裕無いのに向こうは酒を飲む余裕あり、そりゃ傷付くはその程度か!!」

「この程度です!!」

「そうか……」

その瞬間、彼女の動きが止まった

「嘘はついていないようだな」

彼女は落ち着き

「私は星熊勇義、鬼の四天王の一人だ」

「僕はクロノです」

勇義は体の向きを変え、

「じゃあな、強くなったらまた来い」

そういつて帰った

何がしたかったのだろう

次から豆を持ってこよ……

「……………」

ヤバイ……

「置いてかれたー」

全力ダツシユで景色も変わらない地底を移動したのであった

その後、迷子（二回目）になったクロノを散歩していたこいしが見つけたのであったという

霊夢にあったクロノは赤面していた

◇ ◇ ◇

さとりさんという桃色の髪をした方……というかこいしさんのお姉さんは、「あなたとは後で大切な話をするから」と言われて部屋の前で待たされている

今は霊夢と話している

僕はいしさんと話しているが、この人、何を考えているか分からない  
ない

そして、性格も読みづらい

僕は初見の人でもある程度は考えている事と性格が分かる

まあ、なんとなくだけど……

自慢はしゅーりよー、Are you OK?

「それでねーお姉ちゃんねー——」

まあ、今は平和だし、気軽にいよう

「そうですか…お互い、上には疲れませぬ」

こんな日々が続けばいいな（フラグ）

この時、偽りではなく、本物の笑顔であることに、僕は気付かなかった

◇ ◇ ◇

「ごめん、待たせたわ」

さとりさんとの話が終わったらしい霊夢<sup>上</sup>は疲れたように言った

「お疲れ」

短い言葉だけを残した。だって、今からさとりさんと話すことは危険どころの話ではない事が分かっているから……下手したら僕自信が…いや、僕の中にある一つの僕が生きていけなくなる事かもしれない。そんな物だ。

「本当の自分を知る、という事は」

「?。」

口に出した事は取り返せないことに気付いき、

「何でもないです」

誤魔化すしかなかった

### 僕には分からない③

僕は何も知らない、僕は何も知らない、僕は何も知らない、僕は何も知らない、僕は何も知らない

「ごつちだよ〜」

赤髪の猫又？みたいな人が案内する

開けた扉の先はさとりさんがいた

「下がっていいよ、お燐」

「分かった〜」

お燐さんが出る

「……………」

静まり返った空気が広がる

不安しかない。やっている事はカウンセリングと大差ないし、怖い。この空気もうヤダ!! 始めようよ〜

「そうですね、始めましょうか」

心を読まれた!!

そういえばさとり妖怪だった!!

ハイレベルなカウンセリングだ〜!!

何か誤魔化そ!!

「諦めて下さい」

ヤダー!!

「どれだけ知られたくない事情があるのですか」

無い!!

「はあ」

さとりさんはため息をつく

「二つ目の質問です。あなたは何回死にましたか？」

すごいキター

僕、こういう時の対処方法知らないよ!!

「パニックになるのは分かりますが、大切な話です。答えて下さい」

はあ、答えるか……

「何回か分かりません」

本心で答える

「なるほど、あなたの記憶を読みました。白いもやのようなものがかかって分かりません……」

よっしやーラツキー

質問の意味は？さらつとすごいこと言ったよ？

「ごもつともです」

やーらくれーたく

「勝ちました」

負けました

「その白いもやを取り除きたいのですが……いいですか？」  
だめです

「方法としては思い出す鍵となっている物を見せる、ということですよ。あの……聞いていた？人の話を聞いていた？」

「何故か記憶を消された後もあります」

得するヤツいるか？

「しかもご丁寧はその鍵もしっかりのつています」

誰だよ

「今から持つてきますね」

やめて下さい。いや、やめて

そして何故持っている!!

さとりさんが外に出る

ちよつとー

まあ、いいや

記憶について、あいつに問い詰めよう

僕は目を瞑り、精神世界へと向かった

◇ ◇ ◇

「アリカ」

精神世界の管理者、アリカに声をかける

「お帰り〜クロノ☆」

相変わらず気が抜ける声を出す

「前世の記憶について知りたい」

『情報を操る程度の能力』を持つ彼女なら何か知っているはずだ  
「りよ〜う〜か〜い☆」

快くOKしてくれた

「何かあったのか？」

普段なら『りよ〜う〜か〜い☆』なのにおかしい

「作者の記述方法が変わったらしいからね〜☆」

そういえば短文から多少ましになった気がする。多少な!! 多少!!

作者：『うるせーな』

それからしばらく前世について話を聞いた

何か引つ掛かる気がしたのは気のせいだろうか……

◇ ◇ ◇

視点変換 クロノ↓霊夢

何気なく二回目の視点。どうして今までこんなに活躍できなかったのだろうか

「何でこんなにいる訳？」

目の前には数えるのも馬鹿らしいような数の怨霊がいた

「まあ、さっさと処理するしかないようね」

お祓い棒を持ち、陰陽玉を放つ

「外した!!」

気が付けば全ての怨霊が居なくなっていた

(否、違う)

上を見れば人形ひとがたの何かが見えた

『久しぶり〜10年…いや、もうちよいかなく』

禍々まがましいしい妖力を持つ者だった

「あんた……」

霊夢は彼女をにらむ

『そんな怖い顔しないでよ〜』

霊夢は両手に針を構える

『あくでも、上ばかり見ていると下が危ないよ〜』

「つく」

地面から生えた手が霊夢を掴む

手に持った針を投げ、一瞬で対処する

そのたったの一瞬が彼女の狙い目だったのだろう

『死んじゃえ』

《生け贄シリーズ》で溜め込んだ大量の妖力で呪術を起動し、大妖怪でも即死、または致命傷を受けるほどの火力を出す

その術に霊夢は回避も出来ず、直撃した

『そろそろ上のグループも到着している頃かな』

『さっさと大結界を破壊して、外の世界に出よう』

とんでもない事を口にした

「させない……わよ……」

『何で生きているの〜』

「さあ……」

化け物二人の試合が始まる

◇ ◇ ◇

視点変換 霊夢↓クロノ

「待たせたわ」

さとりさんがかごを持ってきた

「一切待ってません」

「そう」

「ふきゅー」

その冷たい空気が和む鳴き声が聞こえた

だが、クロノだけは違う

「何？これ」

何かを思い出すような感じだった

それも、死んだ時の記憶を思い出すようだった

永遠に繰り返す死の記憶

「やめ……」

「なるほど」

原因であるさとりは己の疑問に答えができ、声を出した存在は消えていた

少しずつ壊れる感情



消えていく思い出  
仕方ない。

だって、約3000回の死の記憶が入ってきたから

◇ ◇ ◇

視点変換 クロノ↓アリカ

《警告》

「あくヤバいね☆」

黒月が帰ってくる

「ごめんアリカ、久しぶりに能力使ったから1ヶ月は寝ていた。クロノはどうだ？」

「ヤバいの☆」

「何があった」

「感情（を失って）暴走（した）☆」

「それ、ヤバくね」

◇ ◇ ◇

視点変換 アリカ↓魔理沙

「そういえば今日は霊夢もクロノも居ないらしかったな」

「そうでした、忘れていました」

その瞬間、漆黒の風が間欠センターから発生した

私と妖夢は目を合わせ、

「行きましようか行ってみようぜ」

口をそろえて言った

◇ ◇ ◇

視点変換 魔理沙↓レミリア

「入っていいわよ、咲夜」

「失礼します」

咲夜が入ってくる

「準備が完了しました。そろそろ出発しますか？」

「パチエもどう？」

「遠慮しておくわ」

「つれないわねー」

「レミイこそ、大人か子供かはつきりしない精神年齢と本当かどうか分からない無色透明なカリスマ性に白黒はつきりつけるのでしょうか？」

「ちよつと、パチエー！」

（辛辣過ぎるわよ）

「パチユリー様、違います」

（そうよ、その通りよ咲夜）

「お嬢様はその全てです」

「咲夜あー」

「違うよ咲夜」

（そっその通りよフラン）

「お姉さまは全て黒だよ」

「フランまで!!」

◇ ◇ ◇

そうして3つの戦力が揃った

謎の怨霊の少女 vs 霊夢

クロノ vs 魔理沙&妖夢

上のグループ（怨霊軍団） vs レミリア&咲夜&フラン

次回、東方幻想無限連鎖 第十二話 『暴霊の異変』

## 暴怨霊の異変

視点 レミリア

「禁忌 レーヴァテイン」

「あはは、もっと壊れろー」

物騒な妹がただひたすら炎の剣を振り回していた

しかし、レーヴァテインが触れる瞬間に分裂して被害を減らしている

（おかしいわね。怨霊にしては連携をとれる上に合体したり分裂したりする普通の怨霊もそれなりに強い…それに知能と技術が高い…あり得るのは……）

「咲夜、司令官的な存在を探してくれないかしら」

「かしこまりました」

刹那、

「発見及び確認しました」

「分かったわ。今からいくわ」

◇ ◇ ◇

現在霊夢と戦っている怨霊（本体）の能力は『怨霊を操る程度の能力』

効果は怨霊の強化、知能の上昇、そして操作である

操作の仕方はコード形式。本体に最上位コードを持たせ、下級のコードを司令官的な存在の部下に持たせる。結果、自信は戦闘に集中し、地上の制圧は部下に任せる事が出来る

◇ ◇ ◇

「神槍 スピア・ザ・グングニル」

レミリアは手に持った二本の紅い槍を放つ

「痛つたいなー」

その怨霊はグングニルを両手で防いでいた

無論、両手は消し飛んでいたが

「あら、ずいぶん硬いじゃない」

近くの怨霊を集めて再生している彼に向かってそう言った

「コード2：金髪の吸血鬼を無視して進行、制圧を開始」

小声でそう言った

「あつごめん、名乗り遅れた」

彼は少し笑った

「俺はコード2―A、地上制圧部隊の隊長、怨霊としての強さは第3位だな」

「私は永遠に紅い幼い月、レミアアスカーレットよろしく、怨霊Aさん」

「いや、村人Aみたいに言わないでくれ、そしてよろしく」

「じゃあA<sup>エース</sup>？」

「以外といけてる!!」

お互い状況を確認する

フランによる人里の防衛という名の蹂躪

咲夜による人命救助

その程度の情報はレミアアにもエースにも入ってきていた

二人とも地下での霊夢と本体の決闘や、クロノの暴走については知らなかった

「紅符 レッドマジック」

——しかし、本人達はそんなこと一切気にしていなかったが……

◇ ◇ ◇

紅色の弾幕、大玉から小玉までの様々な大きさの弾幕がエースに向かう

もともとスペルカードルールによって回避が出来る弾幕。

ん？お前守っているかって？知るか!!

話を戻す!!

サイズが小さくなっているエースには当たらない

しかし、あるスペルとの並列起動なら話は違う。それは……

「紅符 不夜城レッド」

太く紅い十字のレーザー。さすがに逃げ場を失なったエースは――

「強い攻撃だな。相手が俺でなければ被弾していたのに」

——レミリアの真後ろに出ていた

「えっ?」

まさに神出鬼没、目の前から消えたことに動揺を隠せないレミリア  
「俺は昔、学者だった。ある時、ちよつとした大発見をしてしまつて  
な」「ちよつとした大発見って何?」「聞くな」「嫌だ(≧▽≦)」「はあ、」  
攻撃をやめていることに気付いていなかったが答えた

「物理的瞬間移動」

「……え?」

「詳しいことは省くけど超高速で動き、物質をすり抜ける存在が出来るようになる」

「その能力を得たマウスがエサの中に入ったこともあつたな」

懐かしむようにエースは笑う

「デメリットはDNAや細胞をいじりまくって寿命が短くなってそのマウスは三日で死んことだな」

「まあ、そこもなんとかして発表しようとした」

「もしかして……」

レミリアは自分の頭の中に入った最悪の答え、『大発見してしまつてな』

「エースが死んだ理由は……」

実験で死んだのならこんな強い怨霊にはならないはずだ

「手柄の一人占めの為の裏切り」

自分の存在を強く見せる為、報酬を一人占めするため、そんなバカなことをする人間は存在する

「……そうね、あなたはこれから上司に気をつけなさい」

「……何で?」

エースは純粹な疑問をレミリアに聞く

「運命がそう告げている」

「……そっか」

納得はしていないが、信頼できると考える

「長話したな、そろそろ再開するか」

「そうね」

刹那、レミリアの背後に現れたエースが――

「神槍 スピア・ザ・グングニル」

――否、エースに直撃した

(何で!?)

とっさに出した両腕が心臓部分にあるコード2を守る

(運命…か…)

先の言葉が理由でレミリアの能力が分かる

(分かったところで脅威が変わらないタイプの能力か…)

例えば、《姿を消す》や、《能力を無効化する》などの能力は、分かった瞬間に脅威が半減する。

しかし、《運命を操る》というのは、分かってても対処が出来ない。

(ちよつと本気を出すか)

両腕を再生し、ひたすら修行した力を解放する

「妖術 覇霊連弾」

《復讐シリーズ》で集めた膨大な妖力を圧縮し、13発の弾丸に変える。

効果は完全追尾式の超高速弾

怨霊は負の感情や存在を力に出来る。13は、不吉な数字の代表のような物だ。

ターゲットを追尾し、ターゲットに触れた瞬間に妖力を解放する。

大妖怪でも、だいたい2, 3発ぐらいで死ぬ。

「ぐふっ、くっはっ、」

2発命中する。

解放された妖力により、コウモリになった体が弾ける。

また2発、レミリアは耐えきった

(なぜ死なない)

己の切り札の25%をくらっても耐えきったレミリア対して若干の恐怖を感じる

今度は3発、

(さすがにおかしい)

少しずつ放つても意味が無いと考え、残りの6発を放つ

しかし――

「何で？」

――煙が晴れたその場には、全身血まみれのレミリアが立っていた  
驚きのあまり動けなかったエースはとあることに気付く

（出血が止まっ……て……）

「私は永遠に紅い幼い月、吸血鬼、レミリアスカーレット」

（超速再生……か……）

吸血鬼の特性の一つ、超速再生で耐えきったのだった

（レミリアにもう魔力は残ってないか）

勝利は確定した。だが、

「降参、完敗だ」

「えっ？」

そんな満身創痍のレミリアを無視し、

「コード2：全地上制圧部隊に命令する。早急に撤退せよ」

直後、全ての怨霊が撤退し初めた

「じゃあなまた殺ろうぜ、レミリア」

そうしてエースはどこかへ消えた

◇ ◇ ◇

視点変換 レミリア↓咲夜

「終わりましたか……お嬢様は無事でしょうか」

彼女の前には、一人の少女がいた

銀髪で水色の目の、普通の少女だった

強いて言えば、オオカミミミとシツポがついていた事ぐらいだ

「どうしたの？」

その少女は端から見ても泣いている事が分かった

振り返った少女の奥には、文字が書かれた直方体の石があった

「お姉さん、誰？」

「私は十六夜 咲夜、あなたは？」

自己紹介と共に名前を聞いた

「わたしは……フェル……」

とても悲しそうな声で言った

「何があったの？」

咲夜は優しく聞いた

「たくさんの変なヤツに襲われて、友達も皆死んで……」

（やっぱり）

咲夜は心から同情した

「さみしいの？」

「…うん」

（これならいける）

「あなた、私と一緒に働かない？」

「えっ？」

「今、人手不足なの」

嘘をつきながら

「あなたについて少し知りたいたいし、ほってられないもの」

「…いいの？」

「いいわよ」

「それじゃあ行くわよ」

「うん」

（たぶん）最後のオリキャラが参加した瞬間だった



## 四落ちの積み

パチン、パチン

どうしてこうなったのだろうか

僕は将棋盤の奥にいる紫さんの微笑む顔を見る

手持ちのコマはない

盤上には「どうしろと？」と聞きたくなるような光景が繰り広げられる

「また私の勝ちね」

「すみません、次は4落ちから6落ちで……」

盤上には全てのコマを取られた上で生かされている玉の姿があった

「その前に、そろそろ本題に入らないかしら？」

「そうですね」

◇ ◇ ◇

視点変換 クロノ↓妖夢

みよん……

黒い渦の中心にいたのはクロノさんでした

渦が晴れた後、下を見ると大穴が出来ていました

今日は地底にいるはずでしたが……

「うお、あぶね」

魔理沙さんが攻撃されていますし、今は敵ですね

「それでは、行きます」

普段のパターンを言います。

今から三人称に変わります

風がふき荒れる

クロノの元である黒月の得意魔法である為、クロノがそうであつてもおかしくない

砂ぼこりの中、風の刃が二人に向かう

(これだけなら大丈夫なのに……)

事実、魔理沙は星形弾、妖夢は斬撃弾で防いでいる

(問題は……)

問題は砂ぼこりでクロノが見えず、そしてクロノを囲む二本の鎖だまぐれで攻撃が当たることが無くなり、残り四本で攻撃を行っている

最後に……

「いやあ、逆の立場になると嫌なものだな」

魔理沙のスペカ、スター・エイク・スパークは、星形弾の中にマスタースパークをぶちこむ技だ

「そうですね。私もあの時を思い出します」

春雪異変、えつと…、分かるよな？

まあいいや、問題はクロノのサブウエポン、ソルスだ

「たまに来るレーザーが厄介ですね」

「そうだな！」

視界を悪くし、火力だけを上げる、それだけだ

「しやらくせえぜ」

「恋符 マスタースパーク」

砂ぼこりが消え去る

「クロノさんもそうですけど、魔理沙さんも十分脳筋ですね」

小声でそう言う

「交代です」

「地縛剣 虚空伽藍」

姿が現れたクロノを囲む鎖を全てレーザー弾で破壊する

「人鬼 未来永劫斬」

斬りかかった妖夢の前にソルスが現れ、

「ブレijingングスター」

マスパを推進力にした魔理沙の打撃がソルスを弾く

「妖夢、ここからは片方負けると両方負けるコースだぜ」

「分かりました、気を引き締めて行きます」

◇ ◇ ◇

(当たりませんね)

その理由は技量以前の問題だった

(やはり音速?とは速すぎます)

音速の双剣による八連続攻撃は、防ぐのがやつとだった

(いえ、ここは攻めなければ)

守るだけでは勝てない、当然の事実だ

しかし、その攻防の体制を立て直す方法がある

(カウンター…でいいですね)

「すう」

深く呼吸し、

「行きます!!」

桜観剣を抜き、七発耐え、八発目、

「断命剣 命想斬」

白桜剣を抜き、霊力をこめる

双剣の片方が折れた

しかし、

「—え?」

—直後に落ちてきた何かに視覚と聴覚が奪われた

カウンターのメリツトは、形勢逆転と確実な一撃

しかし、カウンターにカウンターを重ねるのなら違う

それらを成したものは、閃光型音波爆弾サイレントフラッシュボム

つまり、クロノは武器の一つを、妖夢は視覚と聴覚を失った

すぐにクロノは無制限連鎖を起動し—

「—まつよいはんしゃ待宵反射 えいせいざん衛星斬」

(油断しました…ね…)

勝者は気絶した

◇ ◇ ◇

視点変換 妖夢↓クロノ

「カウンターにカウンターにカウンターですか」

また今度、謝ろう

「そろそろ帰る?」

「そうします」

◇ ◇ ◇

「霊夢、霊夢」

帰ってすぐに見た物？者？は、倒れていた

## 正しい道

《生け贄シリーズ》とは、部下を生け贄に捧げ、魔力・霊力・妖力などに変えるものだ

死んだ部下を妖力に使うエースのように、一発逆転の為に使われるしかし、弱点もある

ものによっては回収効率が悪い

その上、事前に溜め込む必要がある

怨霊は、負の感情からできる

その上、純粋な妖力の塊であるため、回収効率も高い

怨霊の少女はその二つの弱点を補う事に成功し、コードーによる広範囲攻撃を可能とする

◇ ◇ ◇

「霊符 夢想封印」

七色の弾幕が少女に向かう

『無駄だよ』

さっきまでのふざけたような話し方を止め、岩と岩の隙間から手を伸ばす

「そつちこそ」

手足に霊力を巻き、怨霊でできた手を浄化する

手に持った三本の針を投げる

針には宗教的な力が入っており、霊夢の霊力によって相当な威力だったはずだ

「今日、何の日か分かっている?」

その針は簡単に折れた

「三月三十日だったはず……まさか!!」

三月三十日は符清寿の日で願いが叶わない、不幸になる日である

『大した意味無いと思っていたけど、正直驚いたよ』

かれこれ一時間ほど戦い続けている彼女達とはある決定的な違いがあった

(消耗し過ぎたようね)

周りに生け贄があり、こちらは消耗し続ける一方、その上にこの状況を覆せる手段は残りわずか

(やるしかないよね)

以前に使って『大人気ない』と思って使わずとっておいた最強のスペル。その力を解禁する

「夢想転生」

そのとたんに霊夢は透明になった

『どこ行った…つく…』

目の前に符ができ、対応に遅れたために直撃を受けた

(さっきより…強くなっている…)

『コッハッ…』

(いったい…何が…)

周囲から来る符や陰陽弾が彼女を襲う

これこそが霊夢の最大の切り札、夢想転生。

霊夢の能力、《空を飛ぶ程度の能力》

この能力は普段は空間から浮き、空を飛ぶために使っている

夢想転生は霊夢を世界から浮かせ、自動的に攻撃するスペルだ

光をすり抜け、空気をすり抜けて音を出さず、適当な攻撃もすり抜ける

(最後までいい、盛大にやろう)

『コード1:コード4以下の生け贄、コード1はコード2ーAに引き継ぐ』

コード2ーAはエースのことである

彼女は、最も信頼のある部下にコードを任せ、

『その箱は開けないで』

効果は、とある封印の解除と自爆

生け贄によって集まる妖力を使った自爆で、コード1によって誰も防げない物だった

ほんの一瞬前までは…

◇ ◇ ◇

『コード1:コード4以下の生け贄、コード1はコード2ーAに引き継

ぐ』

それは、希望になった

(レミリアにお礼言いたいし、どうしよ)

それは、上司の性格も分かっていた

(アイツ、自爆するのか!!)

(やるっきゃないな)

「コード1：全員、行動の完全停止」

エースは裏切った

◇ ◇ ◇

『何故だ!? 妖力が……』

彼女は、自らの失敗に気付く

『アイツ、裏切ったな!』

自分の信頼する者に裏切られ、憎み、恨む

『コード1：コード4以下を生け贄とする』

しかし、無駄だった

『そんなこともあるのだな』

理由は、行動としてはお互い真逆だったからだ

分かりやすく言えば、一つのキャラを二つのコントローラで逆方向に動かすと動かなくなるようなものだ

『コフツ』

心臓にあるコード1を霊夢の針が貫いた

『負けた…か……』

「あんたもこれに懲りて、もう二度と悪さしないことね」

『そう…だな……』

少女は消滅した

「私も帰るかしら」

霊夢は消えた

その際、一言、

「いったいどこで道をふみ外したのかしら…」

## これからの道

「霊夢、霊夢!」

帰ってすぐに見た物? 者? は、倒れていた

「紫さん、紫さん!」

いくら大声出しても返事がない

「やゝい、紫さんの役立たず、ばかか」

大声で叫んだ

「呼んだかしら?」

「いっ…いえ…呼んでません…」

「そう…」

帰っていった

「……………」

やっちゃまったぜ☆

もう一回、呼ぼう

「紫さん、紫さん!」 ↓三行目に戻る

◇ ◇ ◇

地獄のループから抜けた直後、白黒帽子が見えた

「魔理沙、霊夢が、霊夢が」

「落ち着け」

あとさつきはゴメン

「とりあえず、こっち」

案内する

「霊夢、どうした霊夢」

「落ち着け」

立場、逆になった?

……少女説明中……

「とりあえず、地底で何があったか教えてくれ」

まあ、そうなるよな



「先に、例え話をしてもいいですか？」

「まあ、別にいいぜ」

一応許可は得た

「もし魔理沙が昔親にや友達にいじめられて自殺しようとして失敗、その影響で記憶がなくなつてから心優しい人に拾われて幸せに生きていると、その親と友達が来て、その時に記憶が復活すると思う？」

体験した事を大まかな意味を変えずに伝える

「えらい具体的だな」

否定はできない

「でも、私ならきつと怒るな」

そう答えると思っていた

「そうですか…」

当たり前だ、僕だつてそうだ

しかし、この例文と事実にはたった一つ、大きな違いがある

「僕もそう思います…」

本当に悩む

こんなこと、言っていないはずがない

でも……………

「でも、僕にはそれが出来ません」

「……………何でだ？」

当たり前だ、僕は余計なことを言った

「もう、三千回以上、死を体験しているからです」

後は野となれ花となれ

「…………」

「誰かに作られ、誰かに殺され、そのトラウマでしかない死の瞬間が頭を埋めてきます」

もう、泣いていいかな

「そうか…………」

「!!」

魔理沙が僕の頭に手を置く

「よく、そんな周りを信じれない状況で帰ってきたな」

必死に涙を堪える

「お前は成し遂げたんだよ」

「……」

何で、こんなに優しいのだろうか

何で、こんなに嬉しいのだろうか

「……り……う」

感謝は言葉にならなかった

しかし、

「なん……で……魔理沙……は……認め……て……くれ……る……の……？」

どうしても聞きたかった

「何でだろうな」

「もしかしたら苦しんできたお前に、友達に——」

「——救われて欲しいと願ったからかもな」

「……」

もう三千回も死んだ

そして今、認めてもらった

目標は決まった

それは——

「——僕はもう、幻想興こころこから出ません」

「僕は普通に生きて、華々しくここで散ります」

記憶の中にあつた誰かは聖属性の魔術をかけてもらっていた

こんなものは、祝福ではなく呪いだ

「僕は、この身に宿った呪いをぶち壊します!!」

断腸の思いでいった

「よく言った!!」

◇ ◇ ◇

視点変換 クロノ↓黒月

「どうしたんだ、何か嬉しそうだな」

「勝手に入ってくんな、鬼龍、宣戦布告か？」

「ちげーよ」

黒月は警戒している

「そう言えばお前、何であんな呪い作った？」

意味深なことを言う黒月

「暇だったからなく」

本音を言う鬼龍

「まあ、正直あんなもん、簡単に消せるが……」

「何で消さない？」

「そりやなく」

「息子の目標を潰す親がいるもんかよ」

息子と大差ない存在を思い浮かべる

「納得」

「納得したなら帰ってくれ」

「冷たっ!!」

破壊神と創造神との雑談は終わった

## 銀のオオカミ少女

じょーほーしゅーしゅー

魔法使いのMさん

「まずはパチュリーだなー」

と、言うわけでとりあえずヴァル魔法図書館（紅魔館）に行くことにした

目的は転生の術式について

言い訳は十分、行ってやろうじゃねーかよこんやろー

◇ ◇ ◇

はじめまして、私はフェルです

「わーイヌミミだーかわいいー」

金髪の幼い吸血鬼、妹様が来ました

ありがとうございます妹様

おかげさまで助かりました

どうしてこうなったか、説明します

◇ ◇ ◇

もともとは山暮らしで、自給自足の生活をしていました

私には能力がありました

どんな生き物でも、どんな距離でもお話をすることが出来ました

四大家族で、とても優しい兄がいました

役割は、兄が養蜂、両親が山菜採りで、肝心の私は家事と生物保護、

そして《信仰》でした

一応言つとききます。一切怪しくないの…

内容は、『信仰しやがれ、大いなる神を!!』

すみません、怪しかったです

具体的に言えば、『我が家には神が憑いている。幸福は引き継がれる。最も幸福な者が信仰しろ』とのことです

訳わかんないですね

話を戻します

私達は幸せでした

しかし、幸せには転機があるものです  
ある日、兄が帰って来ませんでした

能力で声をかけても返事がありません

「お父さん、お母さん、お兄ちゃんを探して来ます」

そうして探しに行きました

意外と簡単に見つかりました――

――兄の死体が……

頭の中が空白になりました

『お母さん、お兄ちゃんが、お兄ちゃんが……』

返事はなかった

涙を堪えていると、

「おい、誰かいるぞ」

知らない人の声が聞こえました

あれは多分山賊だったのでしよう

「待て、追いかける!!」

大勢の山賊が追いかけて来ました

私は恐怖と混乱、怒りによってまともな思考が出来ませんでした

その為、慣れている山で崖まで追い詰められました

山賊達が集まって来ました

積みです

「やっちまえ!!」

必死に抵抗しましたが、一人しか巻き込めませんでした

「……………」

悲鳴のあげ方が分かりませんでした

その時、

「何でオオカミ何かが……ぐはっ……………」

『邪魔だ』

崖の上で《何か》が暴れ、落ちてきて、私をやさしく空中でキャツ

チしました

「……………!?!」

驚きとともに何で《このお方》が助けて下さったか分かりませんで

した

『よくぞ生き残ったな、小娘よ』

白いオオカミ……

日本では、オオカミはすでに絶滅しています

しかし、例外があります

白とは神や神の使徒を表します

例えば、白く、目が赤いヘビ他にもイヌやトリがいます

白いオオカミ、つまり神獣です

「何で私をたすけたのですか？」

何よりこの方は、

『日頃の礼だ』

「……」

ただ、好きで信仰していただけでした

「ありがとうございます」

私では一生頭が上がりません

『ところで小娘よ、あの不屈き者に復讐しないか？』

「つえ？」

もちろんしたいです

「しかし、私では……」

私に力はありません

あつ、でも一人ずつ巻き込むなら……やっぱり無理です

『力を貸そう』

◇ ◇ ◇

結果、私は融合しました

その後、山賊達は（約50人）全滅し、私は幻想入りしました

幻想興では友達のおオオカミと暮らしていましたが、先日の怨霊に

よって全滅、咲夜さん（メイド長）に拾われてお嬢様との面会です

「咲夜、その子は？」

「お嬢様、実は……」

咲夜さんが事情を説明する

「なるほど……」

納得したようです。これなら…（フラグ）

「ダメですもといた所に返して来なさい」

私はペットか何かですか!?

よくよく考えれば、一人で泣いている所を拾われて「ここで雇<sup>飼</sup>っていいですか？」です

お嬢様は咲夜さんの保護者ですか!?

「わーイヌミミだーかわいいー」

金髪の幼い吸血鬼、妹様が来ました

ありがとうございます妹様

おかげさまで助かりました

そして妹様、私の耳はオオカミです

「お姉様、イヌミミの何が悪いのー?」

私の本体はイヌミミですか!?

「ツフ、フラン!?!」

でも、妹様のおかげでなんとか雇ってもらえました

あの後にいくつかルールを聞きました

私の役割は移動と買い出しです

あっそうそう、メイド長とお嬢様に能力と使える力を教えました

能力は、《コミュニケーションを操る程度の能力》

使える力とは、変身です

適当に名付けると、普通の人間にミミとシツポを生やした《いつもの姿》

普通の人間の姿の《擬人化》

オオカミの姿の《人狼化》です

館内では《人狼化》は禁止で、人里の近くでは《擬人化》のみです  
当たり前ですね

◇ ◇ ◇

今日はさっそく買い出しです

朝にお嬢様から『始めの客には気を付けて』と言われました

もう出ますし、大丈夫ですね（同じくフラグ）

『メイド長、買い出しに行つて来……』

「……」

目の前には白髪の紫の目の青年がいました  
敵ですね、運が悪い……

私は構えた

◇ ◇ ◇

やっと視点が帰って来た

「美鈴さんおはようございます」

朝の挨拶は大切だ

「おはようございますクロノさん、お嬢様がおよびしていましたよ」  
レミリアさんが？

「ありがとうございます。すぐ行きます」

(誰だろ……)

ドアを開けると、銀髪で水色の目をした少女がいた

(人狼？)

大妖怪の一つかもしれない

「……」

向こうもこつちに気付いた

向こうも構えている

敵か……

最近、戦闘興に合う回数が増えた…(自覚なし)



## 情報違いのアホ戦記

両者は同時に動いた

(やっぱり一撃一撃が重い)

クロノはフェル相手が苦手だった

理由はフェルが技術と身体能力で戦ういわゆる二流だったからだ  
鎖は速度と再生能力に特化している為、強度はそう高くない

その上、《能力を無効化する程度の能力》であるため、効果がない二流は苦手だった

そう、クロノの弱点は純粋な身体能力だ

一方フェルは…

(隙がない…)

鎖は破壊されようと三秒で再生する

三対六本のため、理論上0.5秒に一回攻撃すればいい

逆にその条件の中、近接戦で攻めているフェルの方が異常だろう

「はあっ!!」

音速で背後に回り、得意技の右回転の回し蹴りがきまる

一方フェルは、

(肋骨が何本かいきましたか…)

戦闘をまだ続けられる余裕があった

「私はフェルです。あなたの名前を教えてください」

(唐突な自己紹介だな…)

(まあいいか)

「僕はクロノです」

端的に済ませた

「そうですか…引き続きお願いします」

(こいつ、何がしたかった?)

直後、フェルの爪が伸びた

(なるほど、時間稼ぎか)

「それでは、行きます!!」

フェルが伸ばした爪を振った

「!!」

咄嗟の判断でクロノは左に避けた

(うわ〜)

自分がリーチに入っていない時に相手が攻撃を振った時、斬撃による中距離攻撃を警戒しなければいけない

これまでの経験から回避したが、右腕が千切りになった

フェルの能力、《コミュニケーションを操る程度の能力》は、超高速で相手に情報を霊力を使って送ることができる

神獣との融合により、霊力を斬撃に変え、攻撃に使うことができるようになった

再生しながら鎖を立体○動装置のように使い、回避に専念する(勿論壁には穴があく)

(ここは魔力を温存しないと)

クロノの能力、《能力を無効化する程度の能力》なら、簡単に防げるしかし、先日の変のためには魔力はほとんどなかった

(三日月蹴り)

相手の足をなぎ、体制を崩す。格闘技の基本技術である

対処はそれなりに簡単で、ジャンプでかわせる

(この程度なら…)

回避し、カウンターで斬撃をおみまいする――

――はずだった

「オーバーバーサーク」

さつきまで魔力を温存していたクロノが、魔力を雑に消費するまでは…

「……っ!!」

必ず当たる軌道にあった斬撃を易々と回避し、

(1…2…3…)

「はあっ!!」

ライ○ーキックを連想する飛び蹴りが炸裂する

基本的に飛び蹴りは防御が難しく、火力も高い

「こっちはっ…」

その為衝撃を受け流すには後ろに飛ぶ必要があり、壁は半壊して  
た

(すみません、一瞬だけ使います)

「!!」

たった一瞬だけ、フェルの中にあつた《何か》をクロノは感じた  
たった一瞬でも、威圧が凄まじかつた

(解けて……いる!?)

気が付けばオーバーバーサークが解けていた

(なるほど……)

「同類か……」

彼は咄嗟にアリカを思い浮かべた

(それなら、テストにしますか)

「来い、ソルス」

彼の<sup>最大の</sup>メイノウエポンを呼んだ

フェルが斬撃を放つ

「生命探査 人物指定 『レミリア スカーレット』」

「!？」

この発言だけで察しただろう

人によつては卑怯と言うだろう

しかし違つた

クロノが求めた物は――

「火力『現エネルギー内で最大』対象『フェル・レミリア』」

「天翔閃」

最大の<sup>最低の一</sup>攻撃が放たれた

(これは、私の責任です)

フェルが自ら天翔閃の軌道に入った

『すみません、メイド長』

「合格だな」

全身の血液が沸騰していた

「TYPE：アームズ」

クロノは《箱》から薬品と《血流再生》の付いた包帯を取り出し、応

急措置をする

「…つく」

フェルは斬撃を放つ

「何で？」

自分の攻撃を受けても無傷なクロノに疑問を抱いた

「動かないで下さい。けっこうひどい傷ですから」

（能力の事は黙っておこう）

「危な!!」

クロノはどこからともなく現れたナイフをかわす

「幻符 殺人チェックメイト」

大量のナイフが周りを囲む

（ヤバいな…取り返しが付かない…）

鎖で全てのナイフを弾く

「お嬢様からは客人と聞いていたけれど、この光景なら敵と見なして

いいよね」 「客人!」 「っえ？」 「敵と聞いていました」 「何で

!？」

◇ ◇ ◇

「レミアさん  
」 「お嬢様どういう事ですか？」

美鈴さんが言っていた通り、挨拶に行った

「あら、いらっしやい」

「お邪魔しています」

奥に白衣を着た黒髪で目も黒い、莫大な妖力を感じる男性…めっ

ちやイケメンの人がいた

「誰?」 「誰?」

さっきから僕だけ違うことを言っている（ハモったら面白い）

「（。ん。）ハッ!もしかして…」

「どうかしましたか?メイド長」

「お嬢様…とうとう…」

「なるほど!!」

凶星か、確信と来た（クズ顔）

ペンは剣よりも強し

「ありがとうございます、後は任せて下さい」

「ありがとうございます」

千切りになり、穴があき、融解し、破壊された紅魔館  
言うまでもなくひどい光景

(今はいいか)

もともとここには用事で来たからだ

「今日はよろしくお願いします」

「いえ、こちらこそ」

レミリアさんは既に小悪魔さんに伝えていたようだ

「聖属性の棚はこちらです」

「ありがとうございます」

「それでは、私は」

(これ、聖属性だけで何冊あるんだろう)

本棚は高く、ずらりと並んでいる

(めんどく)

(二冊一冊探るか…)

◇ ◇ ◇

一時間後…

I n f i n i t e c h a i n

このタイトルそっくりな名前の本があった

(これ…悪意だろ…)

にけ・リユノ

作者の名前だ

聖属性とは？呪いの一種だろ

(あいつ、後書きクビになったからってこんな所に出てくんな)

(同じくクビになった僕の気持ちも考えてくれ)

(…読むか)

◇ ◇ ◇

『ヤッホークロノ、元気してる?』

ボタン

これが借り物じゃなかったら、今すぐ燃やしただろう  
『まあまあ、ここからが本題。転生の術式、教えるから』  
くそやろう!!

『詳しくは《銀のオオカミ少女》、後書きで!!』

宣伝するな

本を元の場所にしよう

「地震か」

地面が揺れる

本棚から一冊の本が落ちる

「あっ……」

結構重めだったみたいで、簡単に意識を刈り取られた

◇ ◇ ◇

「痛いな……」

暗い、多分本棚の下敷きになっているのだろう

よくよく考えれば本によってこの状況……

(フェルく本)

なるほど!!

状況をまとめよう。魔力なし力は足りず、そもそも上下感覚がない

…どうしよ

(これがいわゆる『ペンは剣よりも強し』、か)

意味は全く違うだろうがどうでもいい

(そういえば…)

霊夢や早苗、妖夢は霊力を使う

霊力は人間範疇生物なら使える

「はあっ!!」

頭の中で何かが解けた気がした

「成功だ、やった」

これで自分が人間範疇生物だと証明された

「大丈夫ですか?」

小悪魔さんが来る

倒れた本棚は僕の所だけだった

(運わってる)

◇ ◇ ◇

「なんか…誤解されてね?」

咲夜が行った後、エースがようやく気付いた

「あのねえ」

若干文句を言おうと思ったが、諦めた

「本題に戻す。あいつが封印を解きやがった。行動を開始するのは何時くらいだ?」

エースや咲夜から聞いた。霊夢を呪い、異変の元凶である怨霊。そいつより強いらしい

「六日後、ね」

運命がそう告げている

「六日か……」

そういえば、とエースは言い、

絶対命令能力

「大分昔あいつが言っていたけど、コードーが効かなかったらしい」  
「待って、それ本当?」「マジ」「えええ」

『消えろ』は効かなかったけど、『動くな』なら一瞬だけ……「なんだ……」

一安心した

「そんじゃ、そろそろ帰るは」

「そういえば、どこ住んでいるの?」

少し気になっていた質問をする

「旧地獄だ」

レミリアは若干納得した

違い

「危なっ!!」

「何やっているの、反撃しないと勝てないわ」

華仙の打撃がかすった

「っ!!」

相手は鬼、身体能力最強の妖怪だ

しかし、以前とは違う

「それにしても、前より動きが良くなったわね」

記憶の復活による戦闘経験だ

3000回も生きたなら、その中に殴りあった記憶くらいある。経験により、ある程度なら勘が残っている

「ありがとよ!!、……はあっ!!」

華仙の右の包帯腕による打撃を受け流し、回し蹴りを叩き込む

「なかなかやるわね」

しっかり左腕で防がれた

「今度こそ決めます!!」

◇ ◇ ◇

「早苗、調子はどうだ?」

私は何も出来なかった

あの異変でも、私はただの足止めだった

「まだまだです。やはり、霊夢さんにかけられた呪いが強すぎまして……」

やっぱりここでも、私は何も出来ない

「そっか…ありがとぅ……」

「そんな暗い顔して、どうしましたか?」

霊夢にはいつも負けていた。しかし、そのうち勝てると思って努力を尽くした

「いや、何でもない」

春雪異変や永夜異変など、霊夢に何度も助けられた

「……」



あの日、クロノが来た次の日に私は大した理由もなく勝負を挑んだ  
結果は惨敗、相性差によるものだ

そこでやつと気付いた

私は霊夢には勝てない、私は何も出来ない

霊夢は悪い相性の中、あいつの魔力が枯渇するまで戦い、勝った

しかし、私は開始からマスタースパークを放ったが、防がれた上に  
防戦一方だった

あいつは相手が武器や身体能力をメインに戦う二流以上かが分かる

私は能力や魔法にしか頼っていない三流だ

霊夢は両方を駆使する一流だ

いくら努力や研究を続けても、その差は埋まらない

「なあ、私も参加していいか?」

しかし、この方法なら簡単だ

「……………」

無言の中、二人が頷き……

「もちろん!!」

答えを返してくれた

◇ ◇ ◇

「そろそろ終わる?」

「うん……………」  
まだまだだぜ!!

答えが食い違った

「じゃあ、少し休みませうか」

「じゃあそれで……」

とりあえず疲れた

桜が舞った

「そういえば、もう春だな」

「そうですね」

確かにそうだ

「そういえば最近、何か違和感がないか?」

「違和感?」

違和感って何？怖い……

「何か、異変前の…何と言うか…あの、あれだ…（語彙力）」

おいおい

「あれでしょ、将棋盤で囲碁をやっているような感じ」

あ、それは違和感しか感じないわ

「また異変が来るのかもしれませんが、注意しましょう」

「その通りだな」

何で、魔理沙はそんなに楽しそうなのだろうか

最強の仲間である霊夢が（実質）負けてしまい、その上で異変が起

こる

僕はここで散る為に呪いを解除しようとする

幻想郷

魔理沙には何か目標がないのだろうか

いや、魔理沙は霊夢がいないからこそ、目標があるからこそイキイキとしていたのだろう

「それでは、そろそろ再開しましょうか!!」

了解!!

「おう!!」

魔法だ〜吸血鬼だ〜オオカミだ〜

「霊夢……」

あれから三日、ずっと寝ている

永遠亭の洗脳異変の時も僕はみんなに同じような感覚を押し付けていたのだろう

あの時は薬物による洗脳だったため、大丈夫だった

しかし今回は違う

今回の場合、霊夢を呪う事の出来るような強者がいた、ということだ

実際に早苗さんでも解けなかった（異変に参加した事実を使って宗教関連で脅した）

『アリカ、霊夢に付いた呪いを解除する方法はあるか？』

《情報を操る程度の能力》をもつ彼女なら分かるだろう

『四日後に分かるよ〜☆』

違う、今出来ることの情報をくれ。役立たず

「行つてきます」

行き先は魔理沙の家、霧雨魔法店だ

いつもなら魔理沙も華仙もいて、霊夢もいる

とてもにぎやかで退屈もしない

「どこで間違えたのだろう……」

あの頃に戻りたい

あの頃と同じように過ごしたい

「……っ」

悔しい、あそこで暴走した自分が

悔しい、そんな中で『ここで散る為の方法を探す』と言えた自分が

悔しい、自分について知らない時に『今を生きる、ただそれだけで

いい』と言った自分が

悔しい、今ここで何も出来ない自分が

「そんな事考えたって、何も無いでしょうっ……」

「華仙…居たのか」

丁寧語を一瞬忘れていた

「フフツ、あなたは今のままが上出来よ」

「……」

早すぎる話の流れを感じた

「とりあえず行つてきます」

鎖羽を開き、飛翔する

太陽はまだ出ていなかった

◇ ◇ ◇

「……」

気まずい

「……」

何でフェルがいるのか……

「……」

そして魔理沙はフランと遊んでいる

「……」

どうしろと？ どうしろと？

「……」

この空気で先に話だすのはただの勇者だ

「……」

腐つても小説だぞ、これ

「……」

そろそろ怒られるぞ

「……」

お願いだから助けて

「あっクロノおはよう。いつの間に来ていたんだ？」

助かった

「おはよう魔理沙……」

空気が悪過ぎる

「どうした？ 死んだ魚の目をして」

美味しいよね、魚…特に刺身……

「その…以前もめて……」

嘘はついていない

「じゃあ仲直りすれば?」

ど正論だぜ畜生!! 空気考えろこんやろー!!  
しゃーない、謝るか

◇ ◇ ◇

フッフッフ、謝罪のシーンは飛ばさせてもらった

「あの、少し繋げるようにしてもいいですか?」

「繋げる?」

メアド交換みたいなの? LONEのQRコード交換みたいなの?

「能力の効果内に入れたいからです」

怪し過ぎませんか?

「私の能力は《コミュニケーションを操る程度の能力》です」

「はあ?」

ああいう意味ではないことを願う

そんな簡単に能力を教えていいものではないと思います

「繋げる為には個人情報が必要で、魔力や妖力、霊力の《色》が必要で  
す」

「色?」

「イメージで言えば、白い円の中に広がった様々な種類の絵の具です」

ちよつと何言っているかわからない

少なくとも表現が難しいことがわかった

「まあ、適当に小弾でも投げて下さい」

「はあ」

小弾はスペルを構成する上で基礎の弾幕だ

さすがに作ることができる

「色を調べますね」

ただの推測だが、イメージカラーが関係していると思う

例えば霊夢やレミリアさんは赤(紅)、魔理沙は黄色みたいな

「大体分かりました」

絶妙に気になる

「青が濃い黒ですね」

「!?」

イメージカラー、黒かったの!?

かなりショック

『少しチエックします』

刹那、頭の中に声が響いた

『オケです』

「話はそれるけど、何でフェルやフランはここに?」

ぐ・ま・か・し

こういう状況で最も効果的な策略?だ

「妹様が『イヌミミだく、魔理沙の家まで乗せてよろ』と」

咲夜さん、何で許可した?

「……」

フェルが急に黙りこんだ

「どうしました?」

「…気が付けば太陽が……」

フランもいるから帰れないのか

「何秒くらいで紅魔館に着きますか?」

手中の空気を圧縮し、黒い球体を作る

「大体30秒くらいです」

「分かりました。フランを連れて下さい」

「はい」

30秒なら魔力はもつ

記憶の中にあつた魔法

圧縮空気を利用し、光属性対策の壁を作る

そういう魔法だ

「準備大丈夫です」

「OK、」

「『コムプラス・エア』」

大気には、オゾン層が存在する

オゾン層はO・と書き、酸素の粒子で構成する

また、オゾンには紫外線を防ぐ働きがある

それと似たようなものだ

この魔法は圧縮空気を利用し、光属性対策の壁を作る

「今のうちに」

圧縮空気を飛ばし、空が黒くなる

「はいー!」

◇ ◇ ◇

「はあ、はあ、」

ものすごく疲れました

館内に入った2秒後に魔法が解けていました

非常に危なかったようです

「フェルちゃん、明日もいこ〜」

「許可をもらえれば行きます」

妹様は何故か私の事を《ちゃん》と呼んでいます

「遅かったわね、まだ買い出しがあるのよ!」

「すっ、すみません」

メイド長が来ました

私は一息ついて、

「行ってきます」

人里に向かった

◇ ◇ ◇

『すみません、一つ聞いてもいいですか?』

『どうした小娘よ』

少し気になる事を聞きます

『何故、わざわざ』小僧の魔力を調べろ』と?』

もともと繋げるつもりでしたが

『あの小僧の中に《何か》が存在するからだ』

何か?

『私からするあなたですか?』

『似たようなものだ』

《擬人化》状態に移った

人里の中では、「空が…また新手の異変か!!」、と盛り上がっている

人がいます

ストレートに言うところ「アホですか？」です

私からしてあの方は恩人であり、力の源です

クロノさんも、もしかしたら…

その場合、魔力の色が黒かったのも納得です



## ラスボス

あその後、いろいろ回って転生の術式についてわかった

聖属性の魔法、製作者は何となく作つたらしい

発動条件は魂の強さと一定以上の魔力

効果は転生と引き継ぎ

デメリツトは寿命の極端な程の低下

だが、ここで問題が起きる

どうして記憶までもがなくなっていたのだろう

それだけがわからない

手に■■■■を持つ

あれ、言語化できない

アリカの情報（頼りなし）によると、今日、霊夢の呪いを解除する

方法が見つかるらしい

「っ!!」

地震が起こった

最近、地震が増えた気がする

いや、もともとこういう所なのか？幻想郷は

『クロノさん、すぐに来てください』

フェルから通話が来る

『どうしたのですか？』

紅魔館が崩れたなら、手伝うつもりは無い

『地底から妖力が』

どうやら紅魔館の事ではなかったらしい

『すぐに行きます』

霊夢の関係でわずかな期待を込めながら出発する

地底と言えば間欠センター

「生命探知 人物指定 『フェル』」

どうやらすでに地底にいるようだ

鎖羽を開き、飛翔する

◇◇◇

「……」

反応が難しい

間欠センサーまで来たが、感じる妖力が凄まじい

「来い、ソルス」

空色の大剣を呼ぶ

エネルギーは八割程度だ

慣性の法則を無視しながら妖力の中を突き進んだ

ところで何でフェルは僕を呼んだのだろうか

◇ ◇ ◇

「コードー：動くな」

ほんの一瞬だけ止まった《ソレ》に斬撃を叩きまくる

『ああもう、削つても削つてもすぐに回復します』

『そうだな』

《人狼化》して、回避に専念します

しかし、耐久戦をしても少しずつ攻撃のダメージが少なくなっています  
ます

耐性か、強化か……

『フェル、後ろ!!』

「コードー：動く——」

壁から生えた手によって拘束されました

ヤバいです

目の前にいる《ソレ》が妖力を圧縮して妖力弾を作っています

『すみません』

すぐにあの方に言います

やっぱり、私の力では勝てません

力を借りたいのです

『これから面白くなるどころだ。まだ貸さん』

ひどくないですか!?

面白くなるってどういうことですか？

私に妖力弾が直撃しようとした刹那——

◇ ◇ ◇

「間に合え、天翔閃」

ヒーローは遅れてやって来る

そもそも天翔閃は光だから間に合うのは確かだが……

妖力弾と天翔閃が相殺する

「はあっ!!」

風圧で崩れかけた壁を蹴って能力を付与した右手で殴る

「すみません、遅れました」

「遅かったですネ、クロノさん」

「おっせえーよ、クロノ」

まるでなろう系主人公の登場シーンだ

「まあ、実際に大差ないが……」

「じゃあ、何ラウンド目か知らないけど、第二ラウンドの始まりだ」

「無理やりだな」

## 分かりやすい絶望

「第二ラウンドの始まりだ」

「無理やりだな」

おい、格好つけた結果コレはひどい

いくら腐っても主人公なのに：

エースひどい、バカ、空気読め

『フェル、送信どうも』

『当たり前です』

フェルから送信が来る

「コードー：動くな!!」

一瞬だけ止まった

その間に鎖、結界銃を放つ

相手は怨霊

しかし威圧が違った

黒い球体に怨霊らしいドロマークの姿

一見すると弱そうだが、強いのは明確だ

◇ ◇ ◇

怨霊について

ある日、虐待していた義理の息子に妻が殺された

気が付けば自分は縛られ、両腕が切り落とされ、目を潰されて放置

された

横では、悲鳴をあげる実の息子が：

「次は君だよ、罪を数えろ、偽りのとーさん」

その一言が怖かった

逆恨みだと分かっているでも怒りは込み上げて来るものだ

復讐してやる、そうとしか考えられなかった

能力でできる限りの事はした

そして死に、怨霊となった

この体はいい。能力とも相性がよい

この体で、あいつを……

◇ ◇ ◇

「強かったな」

私は無限に強くなるこいつに苦戦した

私は後に怨霊の少女と呼ばれる

封印してコード1で《何もするな》と唱えている

「そういうえば、こいつが言ってた《クロノ》って誰だろう？」

(どうでもいいから)

少女にとつては本当にどうでもいい事だった

◇ ◇ ◇

『フェル!』『はい!』

《人狼化》したフェルに鎖で道を作る

理由は簡単、地面がもうこいつの支配圏内だからだ

「コード1：マジックキャンセル」

エースのコードは効かなかった

「っ!!」

『やっぱりこいつ、どんどん強くなっている』

『そうですね』

『そうだな』

相手は強い

実際、こちらの攻撃が通らなくなっている

『なら、強くなりすぎる前に』

『とどめを刺す』

全員の意見が一致した

すがすがしい気分になったのは僕だけだろうか

今も、放たれる妖力弾の数が増えている

しかも壁に当たって爆発が起き、視界が悪くなる一方だ

『今!!』『了解!!』

『コード1』

『フェル!!』

あの怨霊は、先読みしたのでだろう

そして最も簡単に殺せ、連携の要であったフェルを狙った  
フェルの胸の辺りに小さな穴が開いている

「エース、時間を稼ぐ。フェルを安全な所へ」

「分かった。任せたクロノ」

エースは瞬間移動でフェルを連れて行く

『クロノと…言ったか…』

「!!」

エースが行った瞬間、怨霊がそう言った

あいつの雰囲気かわる

まるで、長年恨み続けた復讐相手を見つけたように

「そうだが、何だ」

警戒を一段階上げる

もともと、時間を稼ぐ事が目標だ。最もノーリスクな会話なら都合が良い

『私は昔…お前と同じ名前のヤツに…殺されてな…』

「それは災難だな」

こいつ多分、話すのに慣れてないな

『だから…』

「くっ!!」

フェルに撃ち込まれた小さな妖力弾

勿論、能力を起動して防いでいる

「待たせた、コードー…動くな!!」

『《無限連鎖》、《天翔閃》』

自らの最大の切り札を切る

「妖術 覇霊連弾」

十三発の妖力弾。あいつの放った物とは比べ物にならないような火力が出る

追撃の《無限連鎖》と《天翔閃》

「やったか?」

「エース、それフラグや」

「……」

積んだ

生きていた

エースのあほおおおお!!

しかし、向こうはボロボロだ

「火力『最大』範囲『ソルスの周り』《天翔閃》」

「はあっ!!」

空色の大剣、ソルスが輝く

とどめを差す

この時、これだけが希望だった

しかし、簡単に絶望に変わった

「そんな……」

ソルスが砕けた

「マジかよ」

光の強化があっても、耐久力が足りなかった

「かっはっ……」

捕まり、拘束された

肺の中にあつた空気が一気に出された

「エース、一回僕を置いて逃げろ。一回暴れる」

「すまん」

エースは行つた

「オーバーバーサーク」

僕にとって最後の切り札希望を使用する

『諦めてめ……ろ』

体を上半身と下半身で千切られた

◇ ◇ ◇

「全く、あいつはいつも……まあいいか」

「そうやって、足掻き続けろ」

最強は行動を開始した

◇ ◇ ◇

『すみません』

『小娘よ、よくやった。後は我に任せよ』

『ありがとうございます』

◇ ◇ ◇

ぐうううう

「お腹…空いた…」

ちようど横におにぎりの笹が置いてあつた

「へえ、クロノが外出かく珍しい」

笹の裏に書いてあつた事を理解する

「いつ帰つて来るかな？」

少女はそう言った



## 化け物

『もっともがけ、私が受けた苦痛はこの程度ではないぞ』  
少しずつ言葉が上手くなっていく怨霊

何か腹立つ

「ゴフツ…」

血を吐きながら再生する

だが……

『回復しても無駄なんだよ!!』

壁に投げつけられながら、意識が遠くなる感覚がした  
オーババーサークが切れた。ソルスが砕けた。

幸い、魔力はまだ残っている

前の世界で《影》を殺した時のように、最後の悪足掻<sup>爆</sup>きは使える  
しかし、これで仕留めきれなかったら……

考えても無駄だ

魔力を、生命力を圧縮する

今思うと、楽しかった

(多分魔法の)森で生まれ、霊夢や妖夢に会い、魔理沙に会う。異変  
の元凶を潰し、五時間霧消しをしていた(意味なし)

めんどくさいので割愛

走馬灯だ

霊夢もまだ起きていない

こいつを倒せば起きるかもしれない

「賭けと行こうぜ、怨霊さんよお!!」

一つ、問題がある

395それが問題だ

何の数字かって？

も・じ・す・う

ふざけるな!!

ハーメルンは1000文字以上だぞ!!

ここで自爆したら余裕で足りないぞ!!

ごめん、誰か助けて

『OK、じゃあ行くは』

自爆する前に意識が飛んだ

◇ ◇ ◇

くそ、ヤバいな！

クロノが死ぬか

とりあえずフェルだけでも

「……………」

いない…

「足跡か？」

地面に痕跡が残っていた

まるでオオカミのような足跡だったが、でかすぎる

少なくとも、フェルのサイズではない

◇ ◇ ◇

「触れるな、消えろ」

壁に投げつけられて追撃にきた手を消す。否、消滅させる

『!!』

驚くのも無理がないだろう

だって……

「誰かと思えばとーきんじないか」

相手が復讐相手だったから

「どンドン強くなっていくと思ったら、能力の影響か」

《罪 を 操 る 程 度 の 能 力》の 使 い 方、

自分に罪という負の行動を上乗せする

怨霊なら、相性がよい。否、良すぎる

しかしその程度では、神々から嫌われ『やーい、厨二病ー』と言わ

れた破壊神は止まらない

『死ぬ!!』

繰り出すのは妖力弾

もとより長年封印され続けた怨霊、修行する時間はなかった為、手を生やすまたは妖力弾しか使えない

逆を言えば、最も純粹な妖力弾は使える  
拘束能力と火力、いわゆるただの三流だ

しかし、ただの三流でも一流に勝つことはできる

「お前、あいつの能力も分からなかったのか？」

——相手が化け物でもなければ……

「そういう俺、改名したんだよ」

黒月は言う

「俺の名前はクロノではない。黒月夕野、名字は先生に、名前はアリカ友人に付けてもらった」

『つく……』

怨霊、黒月の（義理の）父親は名前なんて聞いている余裕はない

直後――

『ここにいたか、黒月』

フェルの神獣がやってきた

怨霊は勝ち目がないことを悟る

「お前誰？」

黒月が無用心に聴く

『誰のせいで信仰と名前を失くしたと思っている』

過去に黒月が戦った中に、白い神獣のオオカミがいた

結果は黒月の圧勝。神獣の信仰と名前が消滅した

神獣事態が消えなかった理由は、フェルの先祖だ

《記録を保存する程度の能力》を持ち、黒月との戦闘の余波でも生きていた

換わりに、神獣の信者はフェルの一族だけになった（ちなみに大神一家という）

「長年生きていたら潰した蚊の事なんて普通忘れるぞ？」

『誰が蚊だ!!』

神獣……ここでは狼からとってロウと呼ぼう（ちよー適当）

「どうでもいいけど、要するに負け犬ってことだな」

『ガルルル……』

負け犬ロウは威嚇でごまかす

念のため言っておく、ロウはそんなに弱くないから二人？がいい争っている間、怨霊は妖力を貯める理由は簡単、勝てる可能性があるかと判断したからだ罪という負の行動を上乗せし、強くなる

会話とは、時間を稼ぐノースクの方法

『死ね!!』

妖力弾は放たれた

火力はエースの放った物とは比べ物にならない

『スペルカードルールとは?』となっても、『今さらだな』としか言えない

妖力弾が二人？に触れた直後――

『!?!』

当たり前のように無傷だった

『我はボツチではない、孤独主義者だ!』

「一匹オオカミは弱い。なるほどな、これで全てが納得だ」

黒月とロウは気付いてすらいなかった

◇ ◇ ◇

「うわ〜」

先ほど火力の基準として登場したエースは正直引いていた

エースは二フェルとクロノ人について知らなかった

フェルには神獣が憑依し、クロノは破壊神に作られたことを……

(今言つて面白くない矛盾、と思った)

◇ ◇ ◇

「アリカ、話がある」

記憶について、問い詰めるつもりだ

僕の予想が正しければ、敵対することになるだろう

「気がつくの、遅かったね☆」

予測させていた

卑怯なものだ、《情報を操る程度の能力》とは……

攻撃、防御。支援に妨害、回復に洗脳エトセトラ……

「何で、こんなことをした?」

これで確定だ

アリカは僕の記憶を消したのだろう

「何でだろうね☆」

無駄に腹立つ

精神世界こころでは自由だ

そして権限さえあれば、何でもできる

「負けるの分かっていても、吐いてもらうぞ」

向現実こうでは壊れたはずのソルスを取り出す

「いいよ☆」

アリカは（おそらく使わない）レイピアを取り出しながら不適に笑う

負ける確率は九割

残りの一割を掴む

切り札。僕的能力、《ありとあらゆる能力を無効化する程度の能力》の限界を超える

「ご存知の通り、僕は誰かに作られ、人間範疇であつても人間ではない。アリカは？アリカは人間か？」

純粋な質問だ。意味はない

「違うよ☆」

違つたようだ

「私は半神☆」

「半神？」

妖夢は半人半霊で、人と霊のハーフらしい

また、鬼龍さんは半龍半鬼で、等洋風ドラゴンと鬼のハーフで、人間範疇でもないらしい

一方アリカは……

「なんとなくで覚醒していたら、黒月に中断させて中途半端な状態になつた☆」

元気に声を出した

笑い事でもないだろうに

◇ ◇ ◇

「霊夢、やっと起きたか」

横に置いてあつたおにぎりを食べる少女に魔理沙は言う

「確かにもう昼頃だからね」

その怠けた言葉に魔理沙は『そういう事ではない』と突っ込む

地震が多い最近の地上と、化け物が多い地下

その温度差はどこから来たのだろうか

## 幻想の終わり

「やっぱりお前だったかー!」

暴走し、記憶が復活した原因

『きゅ?』

「懐かしいな」

人工竜。しかし、メカニクな見た目ではなく、黒く、西洋風ドラ

ゴンといった見た目だ

『ふっきゅー!』

嬉しそうに近づいて来る

アリカから全てを聞いた

記憶を消したのはアリカ自身によるものということ

クロノを作った破壊神がいること

精神世界の全て、存在について

そして、この人工竜についてだ

「とりあえず、帰ろうか」

『ふっきゅー!』

主のペットで名前は無い、人工竜

その頭を撫でながら、そう言うのだった

◇ ◇ ◇

「ただいま」

「お帰—ってどうした!」

「いろいろあって…」

元の色が消えかけるほどに血で赤く染まり、切断された形跡があ

り、ボロボロになった服

または、頭に乗っている竜

そのどちらかだろう

「あら、お帰り。その子は?」

「ただいま霊夢…って霊夢!」

「何よ…幽霊を見たような顔して……」

たぶんそれよりもっと衝撃的だと思う

「魔理沙、霊夢起きたし、宴会しない？」

「いいな」

「異変終了したし……」

「ん？今何て？」

「まかそ

「それと、やることがある」

「？」」

◇ ◇ ◇

『アリカ、この鎖について教えてくれないか？』

『いいよ☆』

今からすることに、邪魔になる物がある

それは鎖だ

『正式名称：無限連鎖 製作者：鬼龍 効果：魔力の大幅上昇・無限射

程・再生能力 e t r …… 種類：羽 製作者からの一言：《呪い》から

逃れる為には五つの力を生かせ』

『なるほど』

◇ ◇ ◇

《呪い》は魔力と魂が一定以上あるとメリットもデメリットも発動する

では、条件の一つである魔力を無くせば？

簡単だ、発動しない

恐らく、魔力の大幅上昇とは、条件の量を超しているだろう

だからこそ、消す

黒月さんの力を借り、消滅させる

魔力はどうするか？

魔力結晶に封印する

「魔理沙、結晶が光った瞬間に全部使って」

「ああ!!」

能力、起動!!

「あれ？」

消えなかった



「何で？」

何度繰り返し返しても消えなかった

「全てを生かせ、でしょ？」

「華仙……」

「どういう事だ？」

華仙はやれやれつとといった雰囲気だ

「あなたの考えた《五つ》は、技術・仲間・道具・能力・順番でしょう？」

「うん」

「仙人である私とは、少し違う」

「どういう事？」

「魔理沙、使わないでいい。クロノ、全部結晶に送って」

「おうん」

「私なら……」

華仙は鎖……もとい無限連鎖を引っこ抜いた

「!?!」

「能力のところを力にするけどね」

脳筋だー怖……

呪いが解け、魔力も失った

ここからは危険と隣り合わせだ

ただの人間だ

昔、誓ったことがある

『今を生きる、ただそれだけでいい』

僕は生きる為に作られた

製作者の優しさなのかもしれない

おかげで今、この瞬間がある

製作者は、魔力という幻想を見せてくれたのだろう

「どうした？」

「何でもない、ちよっと嬉しかっただけ」

「そうか」

幻想が終わった

## 桜の舞う空

はい、エースです

今、死地にいます！

たぶん俺は幻覚を見ているんだろうな!!

そんな俺から一言、

「どうしてこうなった？」

◇ ◇ ◇

「手加減してもこの程度か？さすが負け犬だな!!」

手加減（物理だけ）でも押されるロウ

一応神獣であるロウでも、世界をいくつか滅ぼし、『売られた喧嘩は買って当然』で複数の神を相手して悪名だけを買った黒月にはかなわない（神々の間でも、『黒月』という単語は禁句になっている）威圧や圧縮ができる《圧力を操る程度の能力》（こいつ何の神だった？）

フェルが一度、クロノに見せた力（オーバーバースークを解除させた）で空気や妖力を圧縮し、バリアを張っている（一応威圧による行動制限もあるが、威圧でも黒月が勝っているため、意味がない）

何より、ロウから出る殺気がある（さよなら語彙力）

「あつ、そういえば忘れてた」

黒月が何かを思い出し……

「こいつを殺すんだった」

適当な理由を考えた後……

「死んでまでついて来るな、気持ち悪い」

『!!』

殺される事を悟った怨霊が黒月を拘束する

二人？の戦闘中に逃げていけば生き残っていたのかも知れない

「消えろ、偽りのトーさん」

怨霊にとつて、トラウマの言葉を述べた後に怨霊を消した

◇ ◇ ◇

最大の敵が消えた

自分たちの努力はどうなった、そう考えながら苦笑いする

「うん、そうだ！幻覚だ!!」

若干呆れたエースは、元氣よく発音し、これを幻覚と思う事にした

◇ ◇ ◇

「んじや、そろそろ戻るわ〜」

怨霊<sup>父親</sup>を殺して満足した黒月は（精神世界に）帰ると宣言

ロウも目標は達成したとはいえ、ほとんど何もしなかったため、フエルどう伝えるか…悩む

「少し待―「もちろん俺があいつ<sup>クロノ</sup>と交代している時にお前が攻撃行動を行ったら消すぞ?」……」

脅迫であろうと、相手が相手。本気の自分を素手で相手してきた者だ。引き下がるしかない

「じゃあな」

ロウのもやもやを無視し、自分の言いたい事だけを言って黒月は帰った

「……」

腹が立つ気持ちを抑えながら、我慢してロウも帰った

◇ ◇ ◇

「喧嘩も何だし、事実を全て教えるよ☆」

「戦闘パターンだったのでは!?!」

◇ ◇ ◇

「出番、減ったな〜」

「そうね」

10年以上前、私はあの怨霊と出会った

結果は敗北、紫に助けてもらった

今回の、昔と今との違いがはつきりわかった  
強くなったのだ

あの時、彼女から話を聞いた

生前、親から暴力を受けながら育ち、必死に生きた  
そうして育ったのだろう

『力の持つ者は、力の持たない者を支配していい』と

(今思うとなかなかひどい事言ったわね…)

『いったいどこで道をふみ外したのかしら…』  
道を踏み外した訳ではない

彼女の人生は、歪んだ一本道だった

幼い頃から苦しみ、大人になっても変わらない

むしろ彼女は凄かった

そんな中、知識を集め、強くなった

苦しみを知っているから、他人には同じ苦しみを味あわせようとし  
なかつた

霊夢は一言、

「来世では、幸せに…ねっ！」

四月の桜の舞う空を見つめてポツリと呟いた

## 設定、謝罪

クロノ

能力《任意の触れた能力、魔力を打ち消す程度の能力》

種族：人間

性格：脳筋、戦闘興（自覚なし）

一人称：僕

設定：仮想人格、転生

◇ ◇ ◇

鬼龍

能力《物質を創造する程度の能力》

種族：創造神

性格：可能性を作る（これ性格か？）

一人称：俺

設定：世界の作成者、黒月と仲が悪い

◇ ◇ ◇

黒月

能力《ありとあらゆる物を消滅させる程度の能力》

種族：破壊神

性格：やられてばかりじゃ居られねよな!!

一人称：俺

設定：クロノの製作者、鬼龍と仲が悪い

◇ ◇ ◇

アリカ

能力《情報を操る程度の能力》

種族：半神

性格：嘘はつかない

一人称：私

設定：とりあえず☆つける、後書き役

◇ ◇ ◇

大神 フェル

能力《コミュニケーションを操る程度の能力》

性格：一人ぼっちは寂しいよく（群れとしての強さ）

種族：人狼

一人称：私

設定：紅魔館のメイド

◇ ◇ ◇

エース

能力《無し》

性格：恨みは忘れない

種族：怨霊

一人称：俺

設定：物理的瞬間移動の作成

◇ ◇ ◇

ロウ

能力《圧力を操る程度の能力》

性格：黒月が嫌い

種族：神獣

一人称：我

設定：元はただの白いオオカミ

◇ ◇ ◇

怨霊の少女（名無し）

能力《怨霊を操る程度の能力》

性格：他人に同じ苦しみを与えさせない

種族：怨霊

一人称：私

設定：最強の怨霊

◇ ◇ ◇

黒月の義理の父親（名無し）

能力《罪を操る程度の能力》

性格：最低（おい）

種族：怨霊

一人称：私

設定：最低・逆恨み・ゴミ

◇ ◇ ◇

作者から

ここまで見ていただき、ありがとうございます  
まあ、始めの方だけ見て止めた人が多いでしょう

正直に言くと、幻想興に出てくるオリキャラが7体。二次創作とは  
?となつて、短かめに終わりました

これからはクロノ、フェル、エースの3人だけにします  
この発言の通り、これからも続けます

だいぶ戦闘がありましたし、これからは平和です。異変が減ります  
この話は、転生を繰り返す主人公が、自分について知り、成長する、  
という物語です

えっ、『そんなもんでもいいわ!!』ですか？

それでは、謝罪する所を言います

①記述方法をコロコロ替えた

②オリキャラの数

③主人公の性格の変動

④短い文章

⑤面白くないネタの数々

⑥オチの雑さ

⑦原作キャラに対する価値観

⑧過去編

⑨名無しの怨霊達

⑩誤字脱字エトセトラ……

まとめて言います、本当にすみませんでした  
指摘があれば、どんどん書き込んで下さい  
頑張つて直します

長いことやっていたいなかった次回予告をします  
次回、東方幻想無限連鎖、(何話目だっけ?)『幸せと最後の幻想興』  
それでは、これからもよろしく願います

## 花見①

「花見だー」

「もう春だしな」

「結構満開ね」

お酒の準備をする二人を置いて、バスケットを持ってはっしやぐ  
「嬉しそうだな」

「もちろん！」

当たり前前だ。霊夢が復活し、呪いも解除。異変も終了した上、花見  
だ

嬉しくないはずがない（二重否定）

「そういえば、その子はどうするの？」

「もちろん連れていくけど？」

バスケットから作っておいたサンドイッチを食べる人工竜を見る

「ふっきゅー！」

無邪気な所がかわいい

そしてつまいぐいするな

「そういうことじゃなくて、今のあんたにとってこの博霊神社は危険  
よ？人里に降りた方がいいし、逆に降りたとしてもその子が危険視さ  
せる。どうするの？」

確かにそうだ

博霊神社は別名 《妖怪神社》とも呼ばれる

妖精・鬼、あうん 狛犬

その上、妖怪が遊びにきたりする

「その前に防衛手段がないですね」

「霊力を使えば？」

「あぁーなるほど、無理ですね」

実際、本と本棚をぶつ飛ばした程度だ

「適正、あるんじゃないか？」

「元は魔力を使っていたじゃない」

難しいものだ



魔力の変わりに霊力を使う

具体的に言えば、炊飯器が壊れたから釜を使うようなものだ（要するになれるまで時間がかかる）

「まあ、とりあえず…」

手の平に白い大弾を作る

慣れてないため、意外と集中が必要だ

そう考えるとみんな凄いな

大量の弾幕を使ってスペルを放っているのだから

「どうかみんな、どうやっているのだろうか？」

ポツン、と呟いてしまった

答えなんて、無いはずなのに

「得意なものを見つけたことじゃないか？」

「なるほど」

「まあ、そんな感じね」

『どうやって？』に『こと』はおかしい気がするが、若干納得した  
確かに霊夢は針や御札、陰陽弾を使用し、魔理沙は星形弾やレーザー弾を使う

このようにみんな、得意なものを使う

「まあ、そのうちできるさ」

「それならいいけど」

「何なら私が教えるわよ」

「それはめっちゃ助かる」

さつきから無意識の内に私語が出る

呪いが解けて気が緩んでいるのだろう

「とりあえず防衛手段の問題は何とかなるが、その子の問題はどうするんだ？」

「ああーどうしよ」

今の僕は弱い

積極的に戦闘が起こる人里の外では危険だ

「それなら、一石二鳥の手段があるわよ」

「（茨）華仙！いつから!?!」

「何よ…クロノが『花見だー』って言った所からよ」

「二最初から（では!?)（じゃない!）（じゃねーか!）」  
「で、聞きたい?」

「二うん！（当たり前でしょ!）（もちろんだぜ!）」

華仙は一呼吸し、

「簡単よ、一度祭ればいいのよ」

非常に納得だ

実際、霊夢は原作で雷を防いだ木に住んでいたヤマネを祭っている  
それと同じように実績を作り、一度祭れば認めてもらえる

霊夢が祭れば、博霊神社の評判も上がる

華仙の言う通り、一石二鳥だ

「ありがとう、助かるよ」

「サンキューな」

「また今度ね」

とりあえず今は……

「それより今はおもいつきり楽しもうじゃない」

「だな」

桜はきれいだ

今見ないでいつ見る

「あつ、そういえば、桜の下には死体があるっていう話」

「あるな」

「きれいだったよね」

「きれいだった?」

まるで実際に見たようないい方だった

死体がきれい?サイコか?

「石桜。地獄の怨霊達にとつて、楽しみの一つだ」

背後から聞き慣れた声が聞こえた

「エース、大丈夫だった?」

「おかげさまでな」

「二誰?」

だろうな。そりや皆知らないは

「雑に紹介すると、こいつはエース。怨霊。友達。以上」

「よろしく。あれ、その巫女さん、あいつを殺ったヤツか？」

「そうよ、何か？」

「礼だけ言っておこうと思っただけな」

エースの目付きからは、複数の感情が読み取られる

『なあ、全く話についていけないのだが』

魔理沙が小声で聞いてくる

『要するに前の異変で登場。レミリアに敗北、霊夢と戦っていた怨霊に恨み。以上』

小声で答える

別に間違ったことは言っていない

## 花見②

「花見だー(二回目)」

「もう春だしな(二回目)」

「結構満開ね(二回目)」

ついでにエースは帰った

変わりと言っては何だが、《人狼化》したフェルの背中に乗っている  
レミアさんとフラン、咲夜さんが見える

重くないのだろうか

別にどうでもいいが…

「意外とうまいな」

「意外と……」

絶妙に悲しい言葉

経験がある人もいるのではないか

「にしても、さすがは春の風物詩ね」

「そうね」

和むのも分かる

快晴の空、咲き誇る満開の桜、涼しさを感じさせる心地良い風

あとついでに《意外と》美味しい弁当

改めて言う、《意外と》！

「……」

「どうした？急に」

「……が……」

「ん？」

「会話のネタが…切れた……」

「あらま」

まだ300字程度だと言うのに、あまり考えないで書き始めた為、  
会話のネタが切れた

「どうしょ……」

「お前も飲むか？」

「未成年ですが何か？」

お酒の誘いを断る

未成年飲酒、ダメ絶対

幸い魔理沙は強要するタイプではない為、問題ない

「にしても、お前これからどうするつもりだ？」

さつきの続きか

「とりあえず、人里に降りて暮らすのがいいんでしょう？」

「まあな。降りてからの話だ」

「あー」

少し考える

住居や職業の事だろう

気が早すぎでは？

「昔、幻想郷にはなく、外の世界にある店で働いていました」

「何だ？」

「俗に言う《喫茶店》です」

「《喫茶店》？」

「ざっくり言うと、食事やお話をする所です」

「居酒屋では？」

『違う!!』と突っ込みたくなかったが、文化がない以上仕方ない

「軽く食べて、お茶したりする所です」

「だいたいわかった」

それなら良かった

「んで、その費用はどうするつもりだ？」

「あっ……」

忘れてた

地道にコツコツ働くか……

「ちよつと任せてくれ、返済は時間をかけても大丈夫だから」

「……？？ありがとう？」

疑問符が立った

◇ ◇ ◇

あれから一年が経った

「やっと返済終わったよ……」

「お疲れ様」

「ふつきゅー！」

これから本格的に始めるつもりだ

「にしても、お前も幻想郷こくまに来てから一年か……」

「その言葉、一ヶ月前に言って欲しかったな」

実際、僕が来たのは3月だ

「そういえばあの結晶、ありがとな」

「一ヶ月前に（以下略）」

結晶とは、魔力を捨てる時に使った物だ

いらなかったし、魔理沙にあげた

本人は『マジックアイテムの材料になるぜ』と言ってもらってくれ

た

ついでに霊力の修行は順調な方だ

飛行とある程度の弾幕なら大丈夫だ（スペカは論外）

返済に時間がかかった理由はある

めんどいし、次回にするわ

いいよな？

## 喫茶店

はい、クロノです

喫茶店紹介、やっていきましよう!!

「あのさく、最近投稿止まってなかった?」

「やめて、決して『東方二次創作で失敗したから新しく作ったオリジナルで自由にやろう!』とかそんなことじゃないから」

「作者の首絞めにかかっている!?!」

「違うんだよ、決して『ダンカグの事前登録で無限連鎖の存在を思い出した』とかじゃないから!」

「ああ、それなら納得」

「そして『使っていた口調を忘れた』とかじゃないから!!」

「その能力、拷問に役立つと思うぞ」

「とりあえず紹介! イッツシヨータイム!!」

◇ ◇ ◇

ここは人里の東側、博霊神社に最も近い土地だ

本来、『妖怪神社』と呼ばれる博霊神社の近くには誰も住まない

その為、少し安く土地を買える

木造建築が並ぶ中、一風変わった建物がある

それが『喫茶店』だ

中では二つの生物が働いている

一人の人間と一匹の竜だ

「はいテスト、カメラ回ってる?」

「ふっきゅ!」

「突っ込まねーからな」「あのねー」

無論、カメラなど無い

「そうだ! 霊夢と魔理沙はお礼もあるし、練習もしたいし『客』として入ってよ!!」

「まあ、いいわよ」

「テンション上がったな」

実際は作者の口調忘れのせいだが、スルーしよう

「変わった内装ね」

「あつ、あの机！確か…なんだっけ？グ…グラ……」

「グラステーブルだよ」

「ああ、それ！」

「あとはカウンターね」

「正解!!」

席の種類は二つ、前述の通りのグラステーブルとカウンターだ

前者は幻想興にはあまり伝わっていない

もし早苗や董子が見ると『スゴイ、スゴイ再現!』と言って目を輝かせただろう

「メニューから適当に選んでよ」

そう言つてメニュー表を渡す

種類は様々だ

サラダからご飯、特性デザートまである

「ハチミツパイって…」  
「フェルのリクエストだね」「だろいな」

フェルはハチミツが好物だ

理由は人間の頃、よく兄にご褒美としてもらっていたからだ

ちなみにフェルは、肉が大嫌いだ

「じゃあ、私はそれ一つ」

「私もだな！」

「了解」

手馴れた手付きで準備する

「そういえば、そのハチミツどうしたら？」  
「確かにね」

「まちゆう魔蟲だよ」「まむしん魔蟲？」「へビは爬虫類だよ」

「ほら、去年魔力を結晶に封じ込めたじゃん？あれは一時的で、魔力は回復するんだよ」

「つまり？」

「アリス先輩の提案で召喚した魔蟲と契約した」

「あーなるほど（ね）」

大方察することはできるだろう

『僕の魔力全ての変わりにハチミツとある程度の戦力を下さい』って



頼んだ」

「でしようね」「ついでに戦力とは?」「なかなかエグかった」「……」

『エグい』がどれほどかわからないが、ヤバいことは確かだろう

そしてさっきさくらつと『アリス先輩』と言ったが、クロノはたまに

『先輩』と付ける

「はい、出来たよー」

「いただきます」

注文通りのハチミツパイが届いた

「感想お願い」

「……」

どうやら、表現が難しいようだ

食レポ風に言うならば、『美味しい』の一言だけだろう(要は v e r

y g o d )

「なんというか……感動はしないけどメチャ美味しい』みたいな……」

「それ本人の前で言う!?!」「聞いたのお前だろ!!」

正論に押し切られるクロノ

「そういえば霊夢」「何?」

「実は試験的にやってみたい事があって……」「?」

「かくかくしかじか……」「だから分かるヤツいねーよその説明」「なる

ほどね……成功率は高そうね……」「だから何で分かるんだよ!!」

(メチャクチャ展開の早い) 平和な1日だった

## 洗脳

ここは市街地。お店が並び、繁盛していた  
また、人が多いということは悪人も多いということだ

◇ ◇ ◇

この感じ…悪意かな？

多分あの人かな？

3000回以上生きていると、この程度は感じる事ができる

最近、里で殺人がよく起こっている

理由はわからない

そういった個人が多いだけか、組織が出来ているか、洗脳されているか、挙げればキリがない

どちらにせよ、不安が漂うのは確かだろう

タイミングは、凶器を出した瞬間

「——死ねっ!!」「調理器具は人を刺す物ではありませんよ」

格好をつけながら腕を折った

視線が集まる

当たり前だ、クロノは身体能力だけで全てを行ったから

どうしよう、行動が出来ない

「とりあえず……」

腕と脚を鎖で縛る

これで抵抗は出来ないだろう

「あら、何やっているの?」「華仙、久しぶり(3週間)、見ての通りだよ」

華仙がやって来た

タイミングがいい

「とりあえず一回離れよ!」「そうね」

とりあえず店に戻った

◇ ◇ ◇

「夜なのに明るいわね」

「ソルスの効果だよ」

怨霊の異変で破損したソルスは、幸い内部機能だけは生き残っていた

「……でもこの程度が限界だけど」

大剣としては使えないが、明かりとしては使える

「よし、本題に戻そう」「そうね」

まずは情報交換だ

「僕が見かけたのは8件。いずれも加害者、被害者共に共通点はなし」

「この子は3件。終わった後に蘇生したらしい」「ふつきゅー！」「えっ、

その子出歩かせているの？」

何か問題でも？

「私の方は6件。まあ、結果は同じね」

やっぱり

「で？そこで覗き見 and 盗聴している変態紫さんはどうでしたか

？」「人聞きの悪い言い方ね。ミルクティー一つ」

空間にスキマができ、紫さんが出てきた

注文が早い、図々しい

「まだ開店前ですが……」

具体的には3日前だ

そう言いながらミルクティーを渡す

「私が確認したのは37件。加害者からはこれが出てきたわ」「？」「

一言で言えば光る砂だった

待て、この色どこかで……

「分かりにいけど、とても薄い魔力が付与されているわ」「ということ

は……」

洗脳ってことか……

最悪だな

いや待て、本当に洗脳なら被害者に少しは共通点があるはずだ

そうなると無関係な人を意味なく殺しているってことか！

「誰の魔力か解ったのですか？」

首を振る

「その魔力を追って来た結果、ここに着いたのよ」「？」「

全く心当たりがない

魔力は結晶に入れて魔理沙にあげて、回復する魔力は全て契約に使っている

「誰かを匿った記憶はありません―今度は少し甘めで」人の話を聞け」

少しミルクを多めに入れながら話を聞く

「とりあえず、これは異変として見るべき。解決するのは五人、霊夢、

魔理沙、早苗、華仙、クロノね」「強制……」

「3日後に開店ですが……」「それまでに終わらせましょう!!」「畜生！」

## 歪みの始まり

「魔符 スターダストレヴァリレ」

球を作るように広がる星形弾。魔理沙の火力だけを気にしたスペルの中の例外だ

「っ!!」

クロノの方は飛行はできるが、慣れていない様子

無効化を駆使しながら回避・防御に徹する

無論、クロノの方には必勝の奥の手がある

昔からそうだった

複数の攻撃手段を持ち、最適なタイミングで放つ。これが戦術だった

少なくとも、人間でいたいクロノはこれを使わないだろうが……

ん？話が追いつけないって？

仕方ないなく

◇ ◇ ◇

「ここに来て、複数の点が繋がったよ」「……何だ？」

現場にきたクロノは全てを把握した

暴走・砂・魔力・紫さんの発言。簡単だ

「ここ、先月お祭りがあったよね」「……そうだが」

祭りは毎年ある

よって、去年もあった

「魔力結晶、あの後どうした？」「……っ！」

これが答えだ

「事故かどうかは知らないけど、例えば『摂取すると元の魔力がある場所に行き、殺人欲求ができる』とかだったら納得できる」

「だって、僕が呪いを解く前まで人里には一回しか来ていないから」

「……………」

紫さんが魔力を追ってきたというのは契約している魔蟲の事だったのだから

「とりあえず、移動しようぜ」「うん」

人里の外に出た

戦闘の流れだろう

「……で？・魔理沙、勝てると思う？・僕が」「全くわからないな！」  
本気を出せば必ず勝てる

しかし、出してしまおうと人間ではない事がバレる

そんな中始まった戦闘だ

◇ ◇ ◇

『結晶はどこにあるか』という質問に対しては？」「……気付けばなくなっていた」「！」

状況をまとめる

一年前、魔力結晶を魔理沙にあげる↓盗まれた↓異変

「恋符 マスタースパーク」

一本の巨大なレーザー弾

しかしクロノの目に入ってない

クロノは、最悪のケースに関して考えている

魔力について、クロノはよく知っている

万能。それが最も分かりやすい表現だ

そして魔力結晶には、大量の魔力が蓄えられている

適当に魔方阵でも書いて魔力を注げば、魔法は起動するはずだ

厄介極まりない

「……！」

マスパによく気づくクロノ

能力による無効化は間に合わない

気づけば勝手に右手が出ていた

「……っな!!」

驚愕する魔理沙

当たり前だ。クロノはただ、右手がやけどしてただけだったから  
クロノは妖怪ではなく人間だったはずだから

「神格」

それはあり得ない言葉だった

神格とはそのままの意味だ

「霊夢の神様の召喚？・付与？の修行を見てたらそれが入ってしまって無効化した時にこうなった」

『いやいやいや』と突っ込む魔理沙

反応は間違っていない

魔理沙はクロノの主がヤベ<sup>破壊</sup>ーヤツ<sup>神</sup>であることを知らない

また、その神域の中に☆<sup>情報</sup>を着<sup>を</sup>ける<sup>操</sup>る<sup>半</sup>変なヤツ<sup>神</sup>がいることも知らない

「どうでもいいけど、効果は《抑制》だよ」「よくない！」

はい、チート来ました！

いや、やっぱりこうでなくちゃ

「なら、火力を上げればいいだけだ！」「魔砲 ファイルスパーク」

クロノの言葉が本当なら、文字通り火力を上げればいいだけ。その通りだ

まあ、無駄には代わりないけど

「一年間過<sup>ご</sup>して友達の能力も忘れたの？」

無効化だった

ファイルスパーク。魔理沙の最大火力は対処法がいくらでもある能力で防がれたのだった

## 神と妖刀

「何とか勝った〜」

「さすがに卑怯だぞ」

初めて神格を戦闘に使ったが、性能は高くなかった

理由は信仰が無いからだろう

まあ、神格が目立たないならそれでいいけど……

逆に皆どうやって集めているのだろうか？

『さあ？ 転生と生活を繰り返せばそのうち』と全世界の九割五分を破壊した破壊神黒月の声と、『世界創り趣味を楽しめばそのうち』と知り合いの誕生日に神域をプレゼントする創造神鬼龍の声と、『そんなの、世界の一般常識に自分を組み込むだけでいいじゃない☆』と実際に行動した情報アの半神リカの声が同時に聞こえた気がする

はつきり言ってるさかい

『『『うるさいとは何事だ！』』』

仲良しか！

「どうせだし、武器にでも付与したらいいんじゃないか？」

「ああ、確かに」

納得しながら空間拡張の箱から《妖刀 村雨》を取り出す

「ちよつと待て」「？」

何だろう？

「何でんなもんがあるんだよ」「拾っただけだけけど？」

用事で人里の外に行った時に拾った

刃が青寄りの黒だったからカッコいいし、何より性能が高い

そんな刀に付与してなにが悪い

「とりあえず……」

付与自体はあまり難しくない。だって設定を《自分が放出する》から《武器が放出する》にするだけだから

しかしこれは違う

普段は霊力でやっていたが、これは神力だから感覚が違う

例えると『家ではガスコンロを使っていたが、電気コンロに変えた』



ような感覚だ。何言ってるんだろ

「かーんせーい」

付与は完了した

まあ、使わないけど

「あら、楽しそうにやってるわね」

「やばっ、霊夢だ……」

一番嫌な状況で来た

魔理沙は無理で、僕は霊力が枯渇している

「私も混ぜてくれないかしら」

アウトかな？

綺麗にオーバークイルされる予感がする

要はやればいいんだな！（アホの思考）

さっきの村雨を鞘から外す

「おいちよっ、クロノ」

スルー安定。霊夢の方もお祓い棒を構えている

自身に接触する光の抑制・自身の気配の抑制・空気抵抗の抑制。こ

の3つで不意打ちの準備をする

木を隠すなら森に。非常に目立つ物を放つ

「霊符 夢想封印」

七色の弾幕。回避不可能

どうでもいい

「んじゃ、久しぶりに天翔閃」

巨大な光の柱。ソルスは確かに壊れた、外側は

つまり大剣としては使えないが、レーザーとしては使える

霊夢は結界を張り、光を遮るが、最大限まで接触する光を抑制した

僕には天翔閃は当たらない

「ま、攻撃手段ないけど」

とりあえずバケツに入った水をかける

「……」 「おっ、おい……」

天翔閃の光が消えた頃、若干引いている魔理沙と髪から滴が落ちる  
びしょ濡れの霊夢

「……………」 「コツフツ！」

何故か場所がバレ、腹パン感覚でお祓い棒を無言でぶつけられる  
陰陽玉。サイズが頭おかしい

「……………」 「…すみませんでした!!」

発射され、しっかりボコられた

## 狼日記

昔昔（たぶんひらがなですね）あるところに二人の子供が生まれま  
した

二人は同じ日に生まれましたが、環境は全く違いました（当たり前  
ですね）

一人は人間に生まれ、幸せに生き、もう一人は鬼と竜の間に生まれ、  
二種が戦争中だった当時は粗末に扱われました（かわいそう）

二人の五歳の誕生日、二人の人生は変わります

なんと、どちらも両親が亡くなってしまったのです（人間の方は特  
にかわいそうです）

二人とも義理の両親に預けられますが、生活は逆転しました

人間の子供は義理の家族に暴力を振るわれ、苦しみました。逆に鬼  
と竜の子供は義理の家族に我が子のように可愛がられ、才能を認めら  
れてものづくりに励みます（……）

鬼と竜の子供は神様に才能を認められ、創造の神となりました

人間の子供は狂い、ありとあらゆる物を破壊しました

そして、人間の子供は世界を壊してしまいました

人間の子供は破壊の神になってしまいました

彼らは戦いました

永遠に戦い続け、二人ともが力尽きました

創造の神も破壊の神も眷属を遺し、姿を消しました

◇ ◇ ◇

「とりあえず一通り読み終わりました」

メイド長に任された仕事、妹様の遊び相手

過ぎてしまった事はもうどうしようもない、という内容だったと考  
えます

渡された物でも、さすがに今の絵本を妹様に読み聞かせするべきで  
しょうか

「フェルー！もう一回お願い!!」

どうやら意味が分かっているようです。純粹と言えはいいので

しょうか

「すみません妹様、これから買い出しがあります」「えー」

◇ ◇ ◇

「久しぶりに寄り道しませんでした、意外と早く終わるものですね」  
「買い出しの品はパチューリ様にいただいた袋に入っています」

《空間拡張》って便利ですね

「!!」

咄嗟に隠れました。人里の外のはずなのに人がいたからです

とりあえず《擬人化》をONにします

「人里の外に出るなんて、あなた死にたいのですか?」

「嬢ちゃん、人の事言えてないぞ。まあ、俺は死ににいつているだけだ  
がな」

ぐう、返す言葉はありません

「どうしてですか?」

「嬢ちゃんみたいな年のヤツに分かる話じゃないさ、矛盾だらけだが  
聞くか?」

失敬な!これでも16ですよ!!

「自殺に矛盾があるなら止めた方がいいですよ」

「はっはっは、正論だな!でもこれは覚悟の結果だ。今から守屋神社  
に向かう」

守屋神社って少し苦手なんですよ

「妖怪の山を登るならロープウェイを使うべきです」

「嬢ちゃんはどこに向かうんだ?」

スルーしないで下さい

「……友達(主人、よって嘘)に会おうと……ふもとまでならついて行き  
ますよ」

「そりゃ心強いな、それまでちよつと雑談でもしょうか」

## 狂乱

「俺の家族達は全員、守屋神社を信仰しているんだ」

「達？あつ、家庭を築かれているのでしょようか」

「何か異常でしたか？」

「いや、全く。だがな、俺は龍神様を信仰しているんだよ」

「ああ！人里の中心にある像の事ですか!!」

「信仰対象が違う訳ですな」

「まあ、そのせいで普段から稼いでいる俺だけ妻にも、息子にも外されている」

「なるほど…」

「それだけで普通死に行きますか？」

「はっはっは！笑える。それだけなら別に別れるだけだ。相手が狂信してなければな！」

「本当に元気ですねこの人」

「その『外されている』というのは単なる『仲間外れ』ではなく、暴力的な物でしょうか？」

「察しがいいな、大丈夫だ金は全て老人用の募金に入れて借金だけ大量に残してきたから」

「先ほど言っていた覚悟ですね。もう後戻りするつもりはないようです」

「ついでに遺書は？」

「怨みと呪いの呪文で満たしておいた」

「……なんと言うか、逆にすごいですね」

「ここが霧の湖か…初めて見たな」

「私もめったに見ません（毎日見てる。よって嘘）」

「……あれっ？何で私、止めてないのだろう？」

「ここらは妖精がたくさんいます、急ぎましょう」

「ひえーこえーな」

「何で私は『急げ』と？」

「どちらにしても、この人は死ぬのに」

「それにしても、守屋神社に向かうのは何故ですか？」

「嫌がらせに決まってるだろ、『妖怪に襲われている人間を助けない神様だ』って」

なるほど、ロープウェイに小細工でも仕掛けると事故死にも見えま  
すしね

そろそろ着きそうですね。空に烏天狗が見えます

「よつと、そういうえば嬢ちゃん、こんなに道が悪いのによく疲れない  
な」

「小さな石を踏めば進みやすいですよ」

こんな所、山育ちの私なら余裕ですよ♪

「すみません、これ以上は私も怖いのでお別れです」

「ああ、ここまでありがとうな。嬢ちゃんも気を付けろよ」

「はい！当然ですよ♪」

「……」

あれっ、何で無言に？

「どうかしましたか？」

「……いや、気のせいかも知れないが、目が急になんと  
言うか…目が死んだりしている？んだ」

そう言っ山を登り始めました

私も紅魔館に帰ります

「どうして……」

どうして、あの人は追い詰められたのでしょうか

どうして、私は説得しなかったのでしょうか

霊夢さんなら、魔理沙さんなら、クロノさんなら力強い言葉で止め  
ていた

お嬢様なら、メイド長なら、優しく説得していた

どうして…どうして♪

「フフッ♪アハハハハハハハハハハハハハハハ♪」

もうあの人はいない。私が♪弱い私が殺した♪

弱い私が♪

死んじやった♪強くならないと♪



## 狂乱②

「お帰りなさいフェル、また寄り道していたの?」「……………」  
「フェル?」「はい?」

あれっ? さっきまで妖怪の山に居たような…気付けば帰って来て  
ました

「あつ、すみませんメイド長。これ買い出しの物です」

「……フェル、どうかしたの?」

「……? いえ、特に何も」

メイド長:…どうかされたのでしょうか

「フェル! おつかえり!!」

「ただいまです妹様」

何故、速攻で耳をもふられているのでしょうか

「フェル、疲れているでしょうけど、妹様の相手をしてあげて」

「はい! 分かりました!!」

《いつもの姿》から《人狼化》に変化し、妹様を背中に乗せます

妹様はいつものようにはしゃいでいます

「妹様、今日はどこに行きますか?」

「んー、じゃあ! 地霊殿で!! こいしちゃんに会いに行くー!!」

「……私飛べませんよ」

「じゃあ私が持つてあげる! 禁忌 フォーブアカウンド」

今遠回しに重いつて言いましたね!!

それに私は物ではありませんよ!!

「では、行ってきます」 「行ってきます!」

「行ってらっしゃい」

◇ ◇ ◇

「お嬢様、少しあの子に違和感を感じました。あれが以前言っていた  
…」

「違うわよ」

フェルが出発した後、咲夜はレミリアに報告していた

咲夜はフェルの無言に違和感を感じたのだろう



「今まで、何度も繰り返した。だからこそ分かる。フェルに問題があっても幻想郷に問題がないから違うわよ」

「しかし、お嬢様は今回は異常と……」

いきなりスケールの大きな話になったようだ

「そうね、確かに異常と言ったわ。それはクロノの存在よ」

「はい、確かにどの時間軸にもいません」

珍しく伏線を張ったはずだが……

「フェルはあくまで作戦の要。でも毎回失敗しているわよ」

「では……」

どうやら咲夜はその《作戦》とやらを理由にフェルを調べたいらしい（あくまでこれは二人の中でしかわからない事）

「現在、私はクロノを利用して思うと思っている。あの日、幻想郷滅亡を防ぐ計画を邪魔された上にあんな能力を持っているから」

「それは……確実とは言い難いですが、可能性はあります」

幻想郷滅亡。最悪と言っても過言ではないが、その対策をクロノはいつ壊したのだろうか

そもそも幻想郷滅亡とは何が起こるのか

「あと二ヶ月。《終末の異変》に備えるのが一番よ」

「しかし……いえ、紫様でも失敗されてしまいましたし、他の妖怪などと協力関係を結ぶのが最優先ですね」

正直話についていけないので、まとめる

まず、《終末の異変》いわゆる幻想郷滅亡の異変。紫が対処に向かったようだが、失敗したようだ

次、クロノの存在。レミリア視点で考えると分かる

最後、フェル。タイトルみりゃ分かる

「おっとレミリア、面白い話してんな」

そしてこの異変、主犯はたった一人だけだ

### 狂乱③

ああ畜生！最悪だ

ついさつき霊夢は帰ったしアピちゃん達は寝てるしというかここ  
店内だし!!

すまん人工竜ワープ霧の湖でお願い

「ふっきゅー!」

◇ ◇ ◇

「あつ、フェルいらっしやい」

「……」

「フェル?どした?」

店を片付けている途中、閉店ギリギリにフェルが入ってきた

珍しく無言だ。隈もできているし寝不足で疲れているのだろう

でも少し様子がおかしい。これまで3000回以上生きたため相

手の感情のパターンがだいたい分かるが、明らかに異常だ

どれくらいかって言うとな豆にねばねばがないみたい

「……フフツ」

「……え?」

あつぶな!斬撃かすった!!

えっ?マジどうした!?

◇ ◇ ◇

霧の湖にワープした後、すぐに武器を構える

腰には村雨、両手には8本の鎖

この鎖は霊力で自由自在に操作ができ、わりと便利。しかし、無限

連鎖のように背中から生えている訳ではないので両手を使う

そう考えると超高速、再生持ちで両手を使える無限連鎖は相当強

かったのではないのだろうか

「ひえっ!」

フェルの爪が頭をかすり、額から出血している

超至近距離、肉弾戦ではフェルの方が有利だろう

村雨を抜き、フェルの拳を反らす

だが、現在フェルが有利な理由は至近距離だからだ

フェルには出来ず、クロノには出来る。初歩的で圧倒的な差がある

「ギャハツ♪」

フェルが笑い、腕を振ったタイミングで《人狼化》を使用する

元は確実に当たらない軌道だった腕が人狼化したことよって炸裂する軌道に変わる

二足歩行から四足歩行に変わった為に変わる体制。先ほどの笑いも含め、とどめを刺せるだろう

圧倒的な戦闘経験によつて先読みされていない場合ならばの話だが

「残念」

飛行したクロノによつて回避、完璧な体勢で跳び蹴りによるカウンターを受けたフェルは防げなかった

「さっきの仕返し」

体勢を崩し、防御体勢を取れなかったフェルは文字通り瞬く間に目の前に現れたクロノの拳を防げず、よろめく

8本の鎖を装備したクロノは追撃を試みるが、大した効果はなかった

(どうせ効かないだろうけど……)

「連鎖 負の循環」

クロノが初めて製作したスペカ。以前『スペカは論外』と言ったが、時間をかけて作った代物だ

紫色の小弾が噴出され、抑制でデバフをプレゼント！小弾には抑制が付与されており、火力は低くともどんどんデバフが積まれていく  
かけるデバフは防御と攻撃。鎖が通るようになり、致命的な一撃を減らせる

「フッフ、アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

完全に狂ったフェルに対し、クロノの直感が告げる。まずい、と

高笑い

(やっぱおかしい！今だって小弾が当たっているのに)  
フェルがまだ笑っている

クロノは若干の恐怖を感じるが、一瞬頭の中が変わった光景が入る  
森、動物、川の音、風の感覚。その他まるで誰かが体験したような  
光景だ

(まずい！)

結果的に一瞬だけ脳の処理能力を持っていかれたのだ

《コミュニケーションを操る程度の能力》の使い方の一つ、記憶共有  
フェルがこれまで生きてきた記憶や感覚、感情の全てを共有する。  
大抵の場合は一瞬動けないどころか、脳の処理能力を圧迫し、パンク  
する

クロノがその程度ですんだ理由は以前、さとり記憶解放前の状態  
で人工竜を見させられ、暴走したからである

3000回以上も生きた経験があるならば、他人の16年(フェル  
の年齢)など無に等しい

ただ、一瞬動けなかった事実が残る

だからこそ、焦ったのだ

フェルが振りかぶり、クロノは回避ではなく相殺しようとした  
タイミングが良い、良すぎた。だからこそ空振った

先ほどフェルが《人狼化》してリーチを伸ばしたように、《いつもの  
姿》に戻ってリーチを縮めた

このため四足歩行が絶対に当たるように攻撃を振ったクロノは空  
振り、少しタイミングが遅れたフェルの攻撃のみ当たった

そしてその腕は、クロノの胸を貫通した

「かつはっ！」

「キャハッ♪」

吐血するクロノ。明らかに致命傷、フェルがとどめを……

「残念」

速攻で平常に戻ったクロノによって刺せなかった

無論致命傷。すぐに死ぬはずだが、クロノは自身の胴でフェルの右腕を、左手で左腕を止めていた

フェルが油断した訳だが、クロノの過去を知らないフェルからすると警戒しないのは当然だ

クロノは利き手ではない左手で村雨をとる

直後、フェルが後ろにあった木にぶつかった

「フフツ♪」

クロノは『やっぱりか……』と思ったが、関係ない

気がつけばクロノの額から流れる血が消えている

これこそが村雨の力『使用者の血液の0.5%を消費し、神速で直線移動する』

無効化出来ないし、フェルが洗脳によって動いている訳ではないとクロノは知る

そして、たった1ヶ月の間に性格が急変するする事はあまりない

つまり、フェルの暴走の理由として考えられる理由は……

「フェル、病院行ってこい。お前は解離性同一性障害、通称多重人格になっている（いい所知らんけど）」

「キャハ♪」

フェルは笑う。そしてクロノも笑う

理由は簡単。お互いが勝利を確信しているからだ

フェルの方の理由は分かる。致命傷だから

クロノの方は……

「天翔閃」

それは光の柱。そしてクロノ最大の切り札

この一撃で決着がついた……

はずだった

クロノは胴に違和感を覚える

「っ!!」

固定があまかった

天翔閃は不発。クロノは瀕死。対するフェルは複数のダメージと天翔閃の余波によるやけど



## 高笑い②

胴に大穴を開け、切り札をかわされ、血が不足しているクロノは全く焦っていなかった

(いや、解離性同一性障害はただの希望か。何らかの出来事で狂った可能性もあるな)

今は狂っている事実を気にせず考える

賢いように見えてただの状況判断の出来ないアホだ

フェルが笑いながら斬撃を打つが、無効化している

(しゃーない、背に腹は代えられないし)

クロノは空間拡張付きの箱からまた新たな鎖を取り出す

ただ、先ほどから使い捨てしていた物とは格が違う

「オーバーバーサーク」

クロノが魔力を消費する身体強化技を放つ

あつれれーおつかしいぞー、クロノ君は魔力を捨てたはずなのにな

、

という訳でタイトル回収。無限連鎖

装備者の魔力を増強する3対6本の鎖羽。肉体装備型であるため、

両手がふさがれない

消費なしで飛行でき、無限連鎖と装備者には高い再生能力が付く

そして、これがクロノのメインウエポン

一度着けると外しにくいのと、再生が前提の耐久性である事を除いて

弱点といった弱点がない

要は強い。それだけだ

フェルはオーバーバーサークによって強化されたクロノによって

打ち上げられる

まるで一昔前の少年漫画のように、フェルは空中で攻撃され続けるすでにクロノの胴の大穴はふさがっており、問題なく脚撃を繰り返

せる

「フフフ」

フェルが皮膚が硬い《人狼化》し、同時にカウンターを狙う

クロノが先ほどのフェルと同じように攻撃タイミングをずらす  
ただ、それが既に読まれていた事には気付かなかった

「危なっ!!」

フェルが再び《いつもの姿》に戻り、クロノの脚撃をかわす。その  
上、フェルの後ろに突如出現した鉈が首を掠める

刃の長さは約1メートル。黒色で、光沢が見えているところから金  
属だろう。巨大な鉈だ

(どこから…いや、)

クロノは理解した。鉈はフェルの《人狼化》状態の背中に隠してあ  
り、《いつもの姿》に戻ってもしまわなかったのだろうと

普段《いつもの姿》で着ている服は《人狼化》したタイミングでし  
まっている

それと同じ原理だ

(なるほど、僕が攻撃したタイミングで防御+牽制+前準備で《人狼  
化》、さっきの逆の状態を作るために僕が攻撃を遅らせたら《いつも  
の姿》に戻って鉈を放出。腕を後ろに向け、腰をひねり、鉈を拾って振  
るう。ヤバいな)

◇ ◇ ◇

とある日、フェルが紅魔館で働いている時のことだった

「パチュリー様、紅茶をお持ちしました」

ヴァル魔法図書館にて、パチュリーが満足そうな顔をしていた

この頃のフェルは正常だ

「フェル、これ持ってみて」「……これ何ですか?」

縦長で1メートル以上のサイズの何か。持ってみると少し思い  
布を被っており、中身がわからない

パチュリーがめくる

「……きれいな刃物ですね」

黒く美しく輝いている光沢。金属光沢という言葉を知らないフェ  
ルにとって一番の感想がそれだった

「やっとな錬成が終わったのよ、念のため持っておきなさい」「ありがと  
うございます!」



純粹に喜ぶフェルだったが、横槍が入る

「それ、さつきパチユリー様が錬金術に失敗した時にできたヤツですね！さつき『ちよつと悔しい。何か作ろう』とパチユリー様が言っ作ってまし……」「やりなさい、シルバードラゴン」ぎゃあ！」

シルバードラゴンから全力で逃げる小悪魔

そんな事お構い無しに説明を始める

「あなたは魔力や霊力、妖力の操作が苦手でしょう？」

「はっ、はい。恥ずかしながらですが」

『ですが』は必要ないが、気にせず続ける

「多少扱えるようにするためにある程度付与しておいたわ。もったいないし」

失敗して生まれた金属がもったいないのか、誰でも使える魔力、人間のみが使える霊力、妖怪のみが使える妖力を全て持っているのに有効活用出来ないのがもったいないのか

「どのような効果ですか？」

フェルが気になったため、質問する

「簡単に使いやすい効果よ。魔力を流すと足元に足場になる結界を作り、霊力を流すと振った時に斬撃がでる。妖力は切る物を限定し、範囲が狭ければ狭いほど効果が上がるわ」

「……なるほど、有効活用します！」

◇ ◇ ◇

フェルは矛を振るう。対象をクロノに限定して

## 飛ばされた異常

フェルは矛を振るう。対象をクロノに限定してクロノも矛を振るう。その一撃に全てをかけてただ、互いに意味はなかった

「!?」

クロノが落下した

本人は飛行を解除するつもりなんて無かつただろう強制的に解除、そして再使用不可

(封印!)

まずい、とクロノが考えた時、事態が動く同じくフェルも落ちたのだ

能力も封印されたのか、無効化を使用出来ない。また、体も動かせない

腐って腐り果てても神霊であるクロノを封印するくらいの力があるヤツはクロノの知ってる範囲では一人しかいない

(霊夢)

そして意識がシャットアウトした

◇ ◆ ◇

「……(土下座)」

ほんつとすみませんでした

確かに怒られることめっちゃしていました

申し訳ございませんでした

「……言うことは?」

「申し訳ございませんでした!!」

「あのねえあんた、死にたいの?ふざけているの?何で霧の湖?妖精や人食い妖怪の巣?夜分に戦闘?価値ある?せつかく外した無限連鎖そを着け直すくらいだったら逃げなさいよ!」

確かに……

「でも、向こうからしてきたし……」

事実を伝える

「なるほどねえ、言い訳？この状況で？向こうからしてきたから何？  
それで簡単に命を？ふうん」

「……」

確かにその通りだ。フェルに攻撃された時、本能的に戦った。そして負けた時のことを考えず、霊夢の言うように人食い妖怪ばつかの霧の湖に一人でワープした。あの場に人工竜がいたのに、一対一で死にかけた。よくよく考えればアホらしい。神格を明かしてまで戦う必要がない上、無限連鎖まで使ったのだ。最悪だ

「……（土下座）」

◇ ◆ ◇

（……は……）

昔住んでいた山に似ています。少し、懐かしいです  
確かこの道を出ると兄の養蜂場があったはずです

（……えっ）

そこは完全に荒らされていました

（……）

何故でしょうか、体が勝手に動きます。多分、見てはいけない物があるのでしょうか

（お願い、行かないで……お願い！）

着いてしまいました。あの時の私に

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！」

泣いているあの時の私をみてしまいました

（……また変わった）

そこには、死んだ両親の遺体

次は怨霊に殺された仲間達

最後にエースに運ばれる自分

（……）

「誰ですか？」

『私はお前だ』

そりゃ、自分そっくりだったのでだいたい分かってましたよ  
そして勝手に人の能力使わないで下さい

『H A H A H A、嫌だね』

うむ、清々しい。って心読まれた!?

『その天然っぷり、私でなきや見逃しちゃうね!という訳でお前に強くなる方法を教えてやろう』

強くなる方法ですか……その為にさっきのヤツ見せましたよね?

己の非力さを悔やんで取引成立させざる為に

『正解だ、頭があるようで何よりだ。それでこちらが求める物だ——』

『ワンワンワンワン』「ん?」

あつ、ロウ様。なんか交通事故起こしてますよ

さっきの自称私さんが吹っ飛びましたよ

『おお、小娘か。こんな所でどうした?』

「……何やっていますか?」

ロウ様がやれやれと首を振る

『見ての通り、ドックレースの練習をしていたのだ』

「……相手いないでしょう?」

あと何でソリも引いているんですか!?

ドックレースとイヌゾリを同時にする人?なんて初めて見ました

よ!。(ドックレースもイヌゾリも見たことない人)

それに圧縮神がなにをしているんですか!?

終わらねーからな！

「すみません、強くなるにはどうすればいいですか？」

さっきの会話で気になった事をロウ様に聞く。正直、地道な訓練だ  
と思いますけど

『そうか……』

少し考えているようです

やはり技術面の事なのでしょうか

『小娘よ、お主は先祖について知ってるか？』

「……うーいえ、何も」

どうして先祖？

そういえば家系図を見たことがあります

『大事な話だ。まず、我は一度死んでいる』

「!!」

ふあっ!?

全く関係ないじゃないですか！

『以前、黒月に殺された。お前の住んでいたあの山に侵入し、我が攻撃  
すると回避し、能力付きの素手でワンパンされた。あの時言われた

「耐性ないのか…結局は負け犬なんだな」は腹が立った』

「……」

耐性？その能力の事でしょうか

そもそもロウ様をワンパンなんて……

『その後、お前の先祖によって蘇生された』

「!!」

『お前の先祖の能力は《ありとあらゆる物を保存する程度の能力》、保  
存した物を実現させれる事ができる。そして我はその能力で蘇生さ  
れた』

あつ、長かったのでまとめます

私の先祖は娘が生まれ、能力が開花しなかった事に自分より子孫の  
事を優先しました

研究したのは能力の継承について

結果、大神家の人間が死亡した際に次代に能力を継承する機構が出来上がりました

誤算だった事は私のような個人で能力を持っている者。それも継承されているのです

そして私はその中の全員の能力を使えるようです。使い方はわかりませんが

私の先祖はロウ様に大神家を頼んだ後に継承のため、自殺しました  
「小娘よ、お前はわざわざお前の先祖のようになる必要はない。だがあやつの遺した結果を、お前は大切にしてくれ」

ロウ様は古い友人を思い出すように言った

◇ ◇ ◇

「……」

「どうしたんだ？」

店に戻った僕は普通に営業している

「ふっきゅ♪」「わーかわいいー!」

親といっしょに来たお客さんが人工竜と遊びたいといっていたので許可を出した。せやろ、かわいいやろ

ついでに目の前に魔理沙がいる

「いや、そろそろメインメニューも増やそうかなって」

「別にいいだろ。だってここってお菓子が美味しいから来ている人ばっかだし、というか仕入れる野菜とかを増やした方が多分損するぞ」

確かにその通りだ。ここで人気なのはケーキやタルトやパフエやクレープのような文化の伝わっていない西洋風な物が多い

サラダなどは人気がなく、やはりスイーツが人気なようだ（パンはジャムの影響で売れているけど）

「チョコとかがあったらいいのに……」

そうしたらエクレーアやケーキ等が作れるので入手したい

「チョコ?なんだそれ」

「茶色でドロツとした中毒者量産品」

「マジでなんだそれ」

## 模擬戦

模擬戦だー!!

今回は防御禁止のルールらしい

目的は防御メインだった僕の戦術に回避を組み込む事と魔理沙が戦闘経験を積むこと

それではーレッツ、ゴー!!

◇ ◇ ◇

互いに向かい合い、同時に飛ぶ。ちなみに宴会の準備は昨日の内になんとか終わった(言うタイミング)

魔理沙の周囲に魔方陣が発生し、様々な弾幕が張られる

小弾レーザー弾星形弾。あと地面になにかを投げた。多分弾幕を発射する使い捨てのマジックアイテムだろう

無限連鎖を起動し、弾幕を回避しながらマジックアイテムを破壊する。密度は減らした方が得だからだ

「連閃 竜巻斬り」

適当に作ったスペルを使う

多少弾幕を馴ればパターンとして使用出来る為、1つ出来れば2つ3つは簡単に作れるようだ

実際魔理沙はマspaをメインにスペルを作り、派生型を利用しているし

村雨の消費する血液量を抑制し、魔理沙の回りを回りながら小弾、クナイ弾、レーザー弾を放つ

ちなみに大して強くなかった。理由は単純で

①魔理沙の弾幕をかわしながら移動するのは難しい

②純粹に目がまわる

よってゴミ、もう使わない

というか魔理沙の弾幕の密度が高い

普段は能力でごり押ししていたが、特に周囲の魔方陣から放たれるレーザー弾が厄介だ

普通のレーザー弾はチャージ中に細いレーザーが出るが、魔理沙の

は常時動きまわっている

「恋符 マスタースパーク」

一本の極太のレーザー。先ほどと変わらない量の弾幕が降り注ぎ、魔理沙の後ろから数本の白い筒：多分マジックアイテムが飛翔している。もちろんマスターパ自体も強力で、ゆっくり動いている為に逃げ道が制限される

早く弾幕を掻い潜り、マスターパから逃げる必要がある為、風魔法で追い風を生成して速度を上げる

風魔法自体は高い適正があるらしく、それ以外が使えない

反撃はなるべく少ない方がいい。長期戦になればなるほど魔法使である魔理沙の方が魔力が残るからだ

自機狙いのレーザー弾。これで回避に集中しながら反撃出来るため、ちょうどいいと言える

(さっきのは…上か)

白いマジックアイテムの位置を確認する

「ブレッキングスター」

八卦路を箒に取り付け、加速する

その状態でぶん殴るのがブレッキングスターだ。かわしやすいくど当たれば痛い、おおぎっぱな評価はそんな感じだ

一発目を左に動き、回避する。なぜか、少し流れ星をイメージした

二発目は下によける。照準をミスったのか、若干上向きに飛んでいったため回避は簡単だった

いや、なんでそんな初歩的なミスを…：しまった！

魔理沙の通った後から空が見える

そこには幻想的な光景が映されていた

一 たった数個のマジックアイテムから出来た弾幕の雨雲が  
《……………》

そして雲は雨を降らせる

真上から雨が、斜め上から流れ星が、斜め下からレーザーが。上下約120°を同時に意識しなければならぬ

「魔砲 ファイルスパーク」



そして魔理沙最大火力を前に、能力で防御してしまった

ギブミーチョコ！

「霊夢ー」

「どうしたのクロノ」

とりあえず霊夢を誘いに来た。理由は簡単、紫さんに殴り込むからだ

具体的にはバレンタインに『ギブミーチョコ』とゾンビの呻き声のように言いながらクラスの子集団に男子集団が近寄ってゆく恒例行事とにたような物だ。愛の記念日とはなんだったのだろうか

要は紫さんに『ギブミーチョコ、それがダメならカカオの木』と言いに行くつもりだ。むしろカカオの木の方が欲しい

「かくかくしかじか」

「だから伝わるはずが……」

「なるほどね、でも今日はダメ。だって明日の宴会の準備があるし」

「お前らの間には私には見えぬ糸電話でもあるのか!？」

などと魔理沙がほざいていますがとりあえずスルー

「ちなみにルートは迷いの竹林↓迷い家だけど、一回わざと迷子になるよ」

「すまん、迷いの竹林は勘弁してくれ」

「……?なんで?」

どうしたんだろう

永琳とかとでも喧嘩した?

「確か華の異変のちよつと前のヤツでしょ、あんたが勝手に迷子になったヤツ」

「あの時はタケノコ収集対決に夢中になっていたからだろ!というか置いて帰るな、探したじゃねーか」

「結局半泣き顔で発見されたって妹紅から聞きましたよ!」

「急に下手くそな敬語使うな!」

なんかあーだこーだ言ってる

ほつとこほつとこ

無限連鎖を開き、空を飛ぶ

そういえば華仙にまた無限連鎖引っこ抜いてもらおう  
そうこう考えている内に迷いの竹林に着いた

と、言う訳で……

「あー迷ったなーこれならパンでも撒くべきだったなー(棒)」

景色が変わった。見えるのは妖怪の山、迷い家についた

「お邪魔します」

迷い家。名前の通り迷った者が行き着く場所。地理的には妖怪の山にあり、紫さんの境界に近い場所だと言われている

ついでに博霊の大結界があるため、博霊神社もかなり近いらしいけど、まああんまり詳しくないんだよね

スキマが開き、中へ入った

◇ ◇ ◇

「そもそもお前毎回おせーんだよ！博霊の巫女だろ！異変解決の専門家だろ！頭の中が『楽園の素晴らしい巫女』だろ！」

「早とちりしまくる結果、相対的に私が遅くなっているだけでしょ！それと二つ名！『恐怖！学校の極寒に震える魔法使い』」

「神秘録と天空璋を妙に上手くまぜるな！違和感ほぼねーじゃねーか！」

まだ喧嘩続いていたの!?

というか二人が喧嘩している所久しぶりに見た気がする

「あつ、お帰りクロノ。結果は？」

「失敗。お菓子持ち込んだけど無理だったよ」

さっきのお菓子を食べながら拒否する紫さん…なんか腹立つ  
「代わりに依頼してきた時、その依頼を完遂するとOKらしい」

控えめに言っつめんどくさい